

圓先大師傳

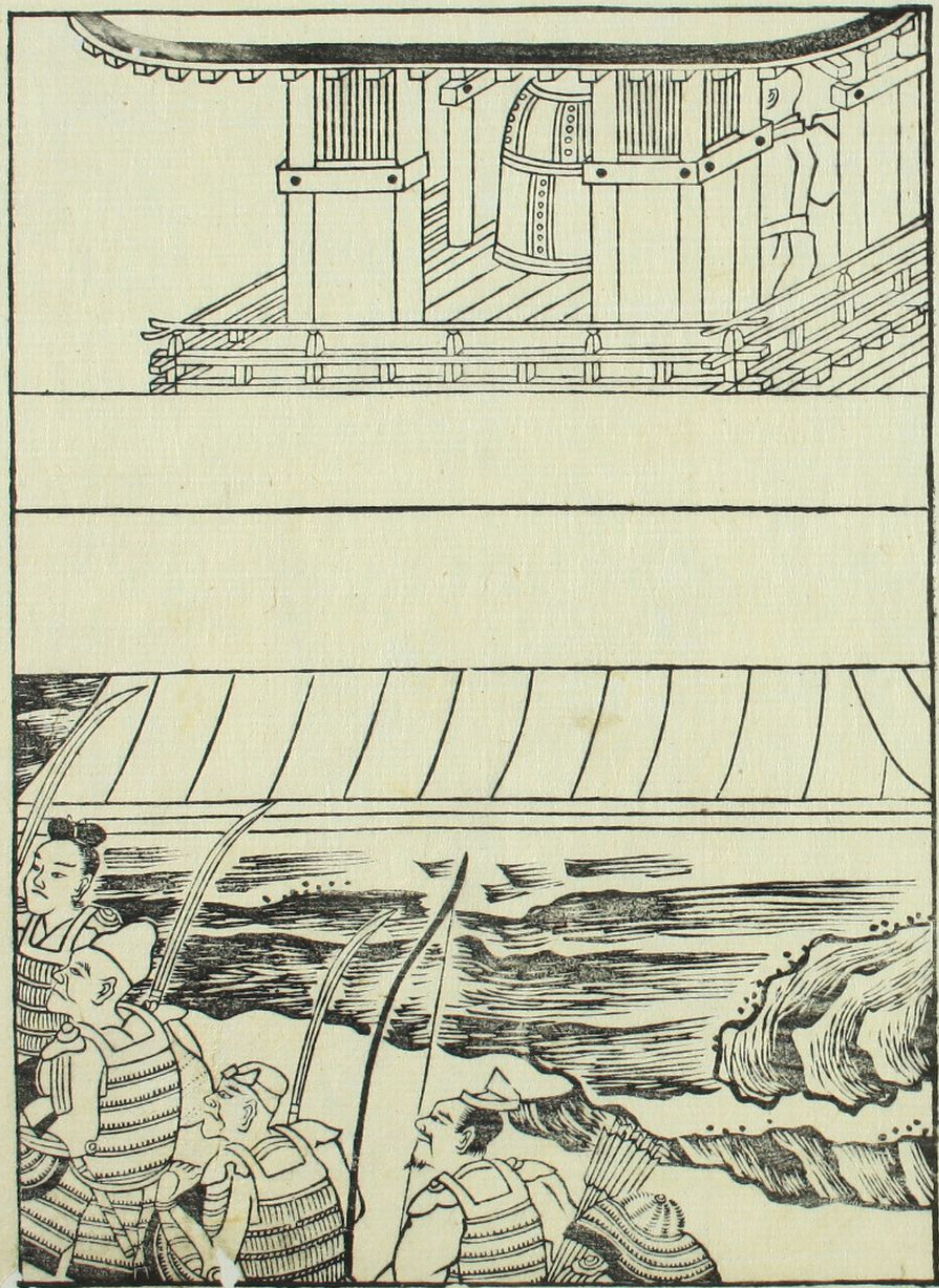
世之二



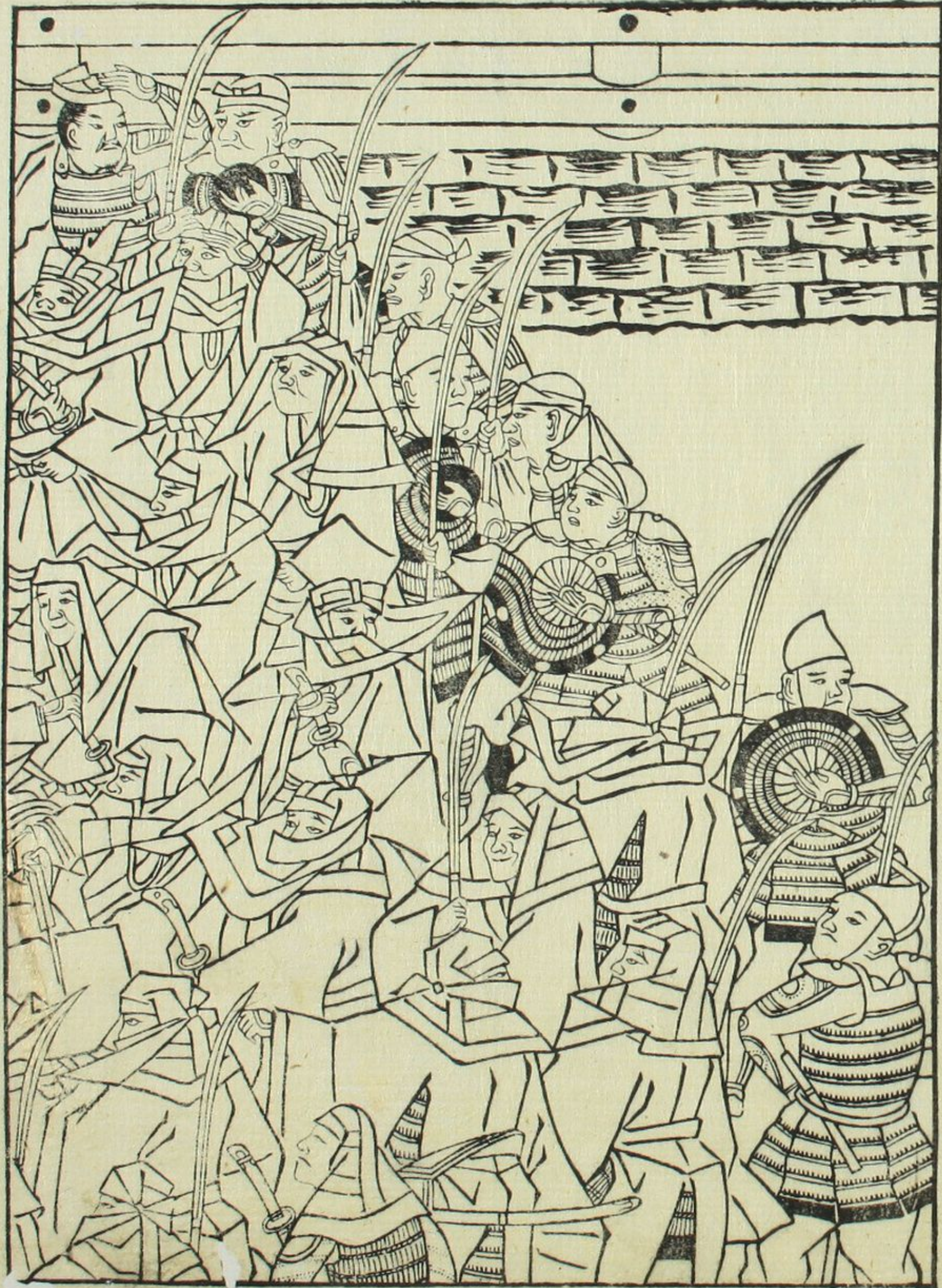
法然上人行状畫圖第三十一

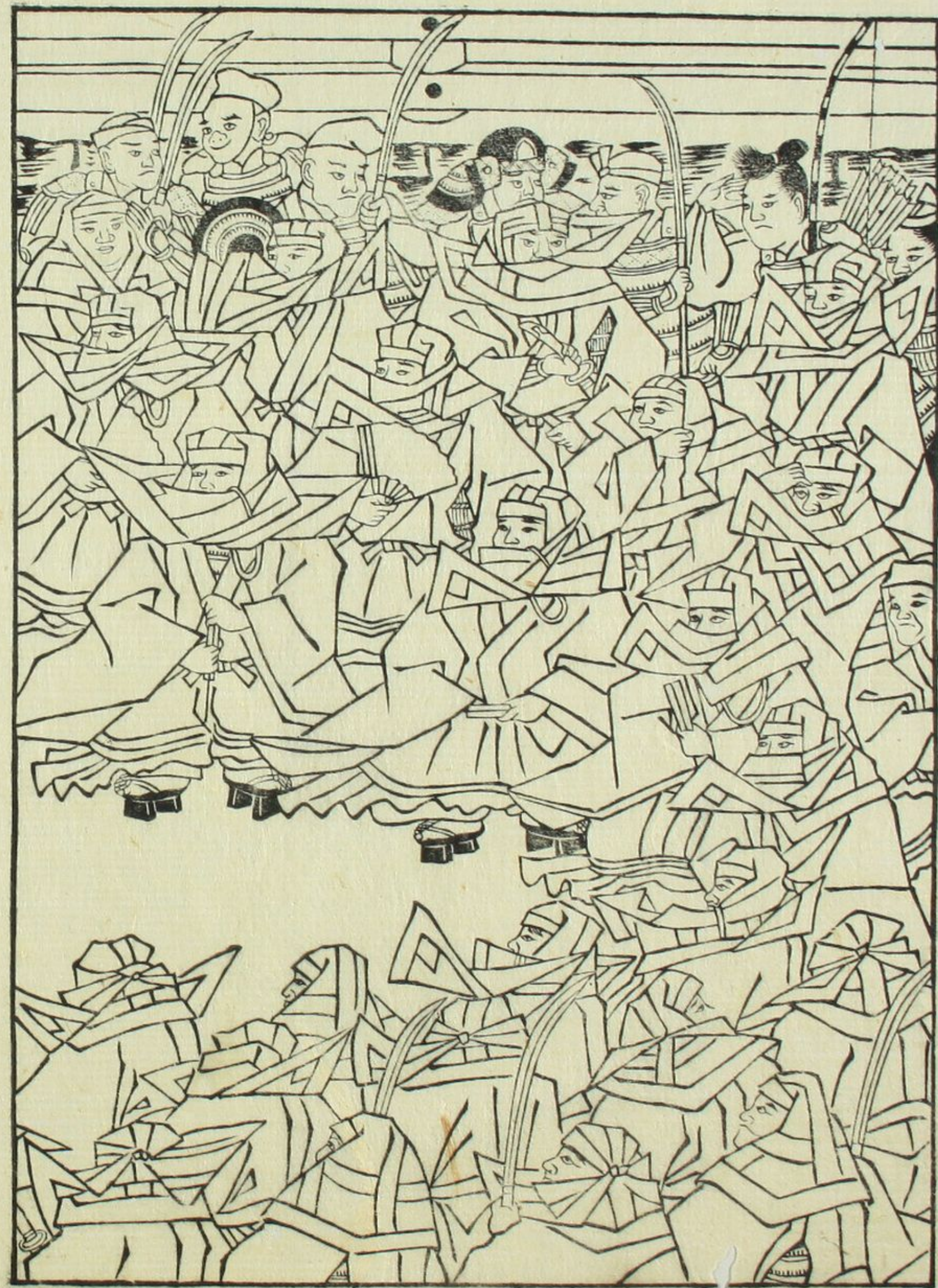
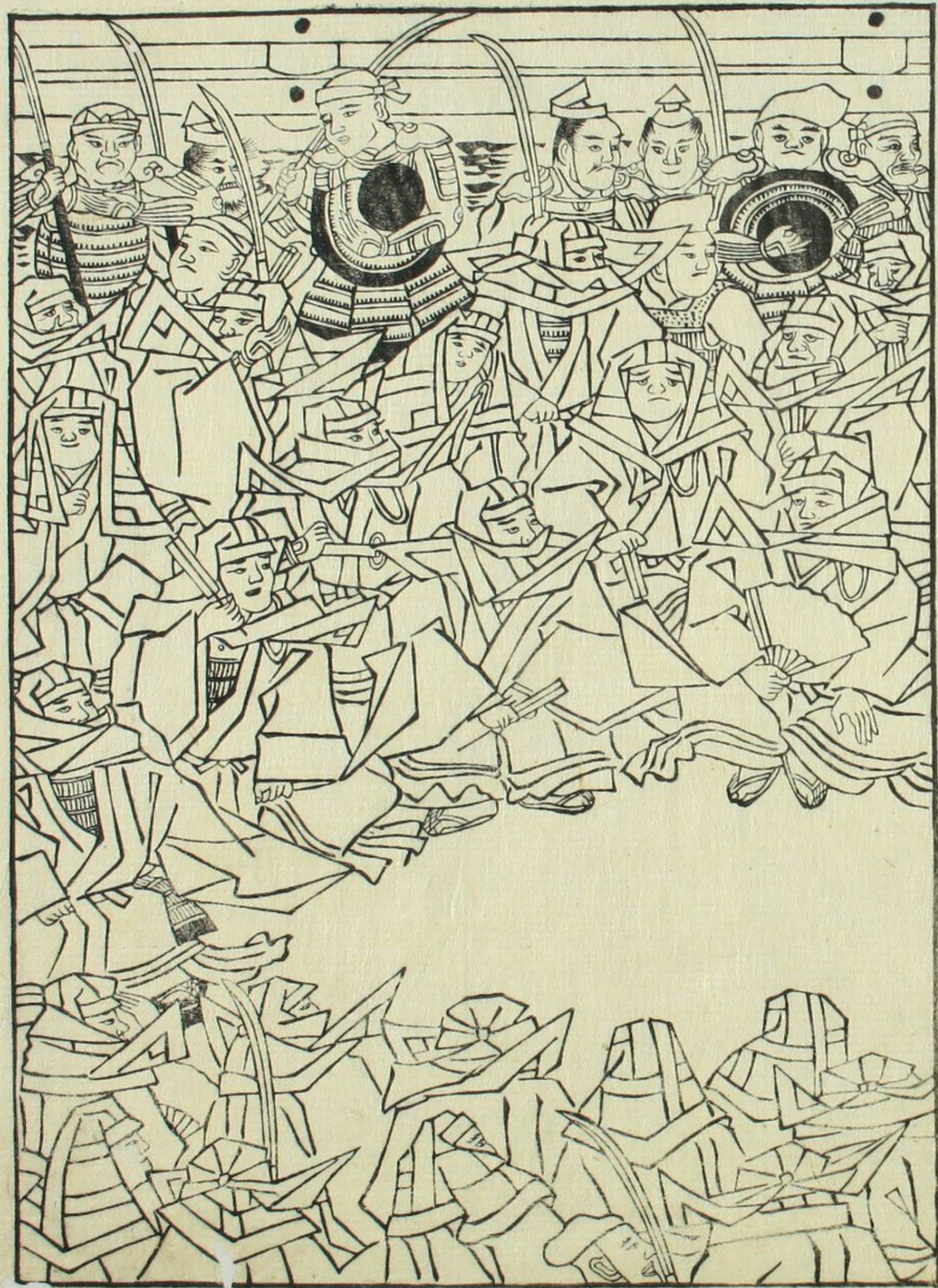
上人の勸化一朝よこら四海よをよぶまゝもよ
門弟れ中に專修に名流りの本願よ事流よせて
放逸乃りよぎ流たすまのおほり々里これよ
よりて南都北嶺の衆徒念佛れ興行をさぐらん
上人の化導を障身せんと流。玉御門院の御宇
門徒乃あやまらなを師範よおほせて蜂起する
うきまこえりかごをたにどれくく屋ん

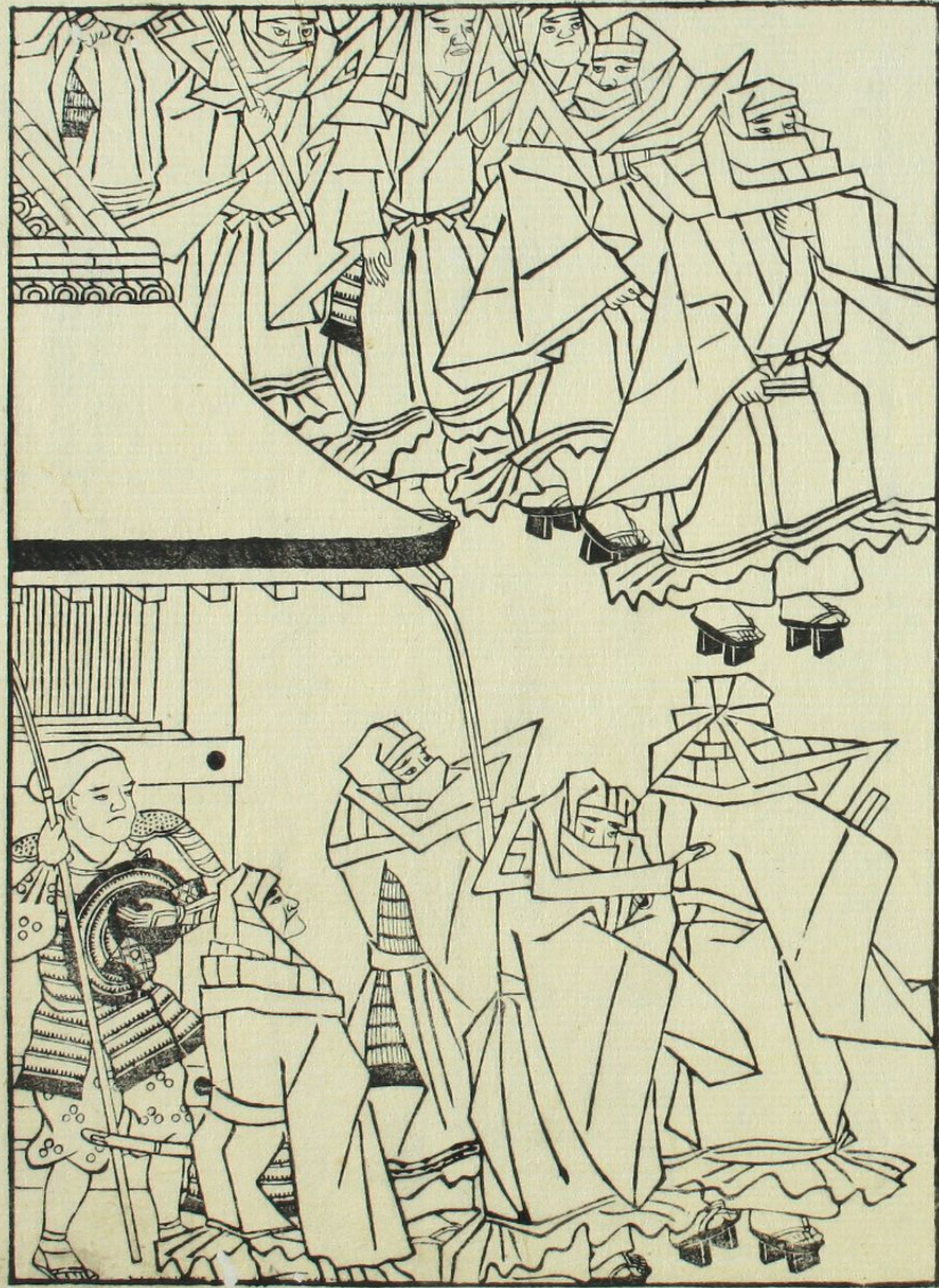




一、ほらに元久元年の冬、比叺山門大講堂の
 庭に三塔會合して、專修念佛を停止すべし
 のり。座主大僧正 真性 祈申々々







上人此事淺聞殆てすくしてハ衆徒の鬱陶を
やどめ志りぞきてハ弟子乃僻見をいあり
めんたえよ。上人の門徒をあらめて七箇條の
事を志して起請をたす。宿老をらるるも
八十餘人をえりひく連署せり。後證よ
そまへどれいら座主僧正に進せらば。件起請
文云

あまのひを予が門人念佛れ上人等にはるぐ

一いまづ一句れ文義をうらみずして真言止
觀を破し。餘の佛菩薩を謗するも淺停止と
處れ事

一無智れ身をえらて有智れ人よ對し。別解別行の
輩にあひて。このとて諍論を了す事を
停止とすべき事

一別解別行乃人よ對して。愚癡偏執れ心を
えて本業を棄置せり。稱してあれらに

これをもつていふ事は停止すべき事

一念佛門よをもつて戒行なりと号してをい

娼酒食肉減す免たましく律儀をよもは

をい。雜行人と名づけて。弥陀の本願を滿

をれ。造惡をこそもてしれこといぬ事は

停止すべき事

一いふ。是非をいふまへざる癡人。聖教をい

たれ。師説はるじきてほりまゝにこれ乃

義をのべこゝりに諍論はくつて。智者に

こゝに此愚人を迷乱するは停止すべき事

一愚鈍は身ををらるゝに唱導をこれ。正法を

まゝに種くは邪法をとまて無智は道俗は

教化とす。事を停止すべき事

一三づつ。佛教よあはる邪法をとまて

いひつらて師範の説と号するは停止と

るべき事

元久元年甲子十一月七日沙門源宣在判

信宣 感聖 尊西 證宣

源智 行西 聖蓮 見佛

道且 導西 寂西 宗慶

西緣 親蓮 幸西 住蓮

西意 佛心 源蓮 源雲

攸西 生阿 安照 如進

導宣 昌西 道也 遵西

義蓮 安蓮 導源 證阿

念西 行首 尊淨 歸西

行宣 道感 西觀 尊成

禪忍 學西 玄耀 澄西

大阿 西住 寶光 覺妙

西入 圓智 導衆 尊佛

蓮惠 源海 安西 教芳

詣西 祥圓 辨西 宣仁

示蓮	念生	尊蓮	尊忍
業西	仰善	忍西	住阿
鏡西	仙空	惟西	好西
祥寂	戒心	顯願	佛真
西尊	良信	綽空	善蓮
蓮生	阿日	静西	度阿
成願	覺信	自阿	願西

連署此交名かくれ〜。執筆右大辨行隆

息法蓮房信空也

又座主よ進で〜る起請文云。近日此風聞よ
 い〜。源空偏よ念佛の教をす免〜。餘乃
 教法を〜。諸宗これよ〜。後夷〜。諸
 行これよ〜。滅亡と云。この有故傳聞よ
 心神驚怖と。此力よ。緯山門よ。議衆
 徒よ及て。炳誠を加へさ〜。貫首へ申送ら
 べき。此條一よ。衆勸化を〜。一よ。衆恩を

ふろふぬにそもところ海い。貧道れ身をりちて。
忽り山洛のいきとやりにをよぶ。喜ころるハ。
謗法の名減りて。たぐく花夷れ謗をらめ殊
まゝ衆徒れ糾断よあつて。争貧道乃怒
歎を座とめんや。九称隨の本願云。唯除五逆
誹謗正法と。念佛をすめん輩。しりる正法減
そらんや。僻説減きて弘通し。虚誕をえて
披露せし。を糾断あつて。炳誠あつて。望

ところたり。福ふあぬ。此等れ子細。先年沙汰
の時起請を進平。其後いよぶ。變せ。つて
陳じつてあつて。いよぶ。巖誠とて。り
重きれあひ。哲言状又再三よをよぶ。上件乃
子細。一事一言。虚言ををえらして。會釋をちうけん。
毎日七萬遍れ念佛。じつりく其利減り。れい
三途よ墮在して。現當二世乃依身。は。ひに
重苦小沈て。たぐく楚毒をうけへ。伏乞當寺れ



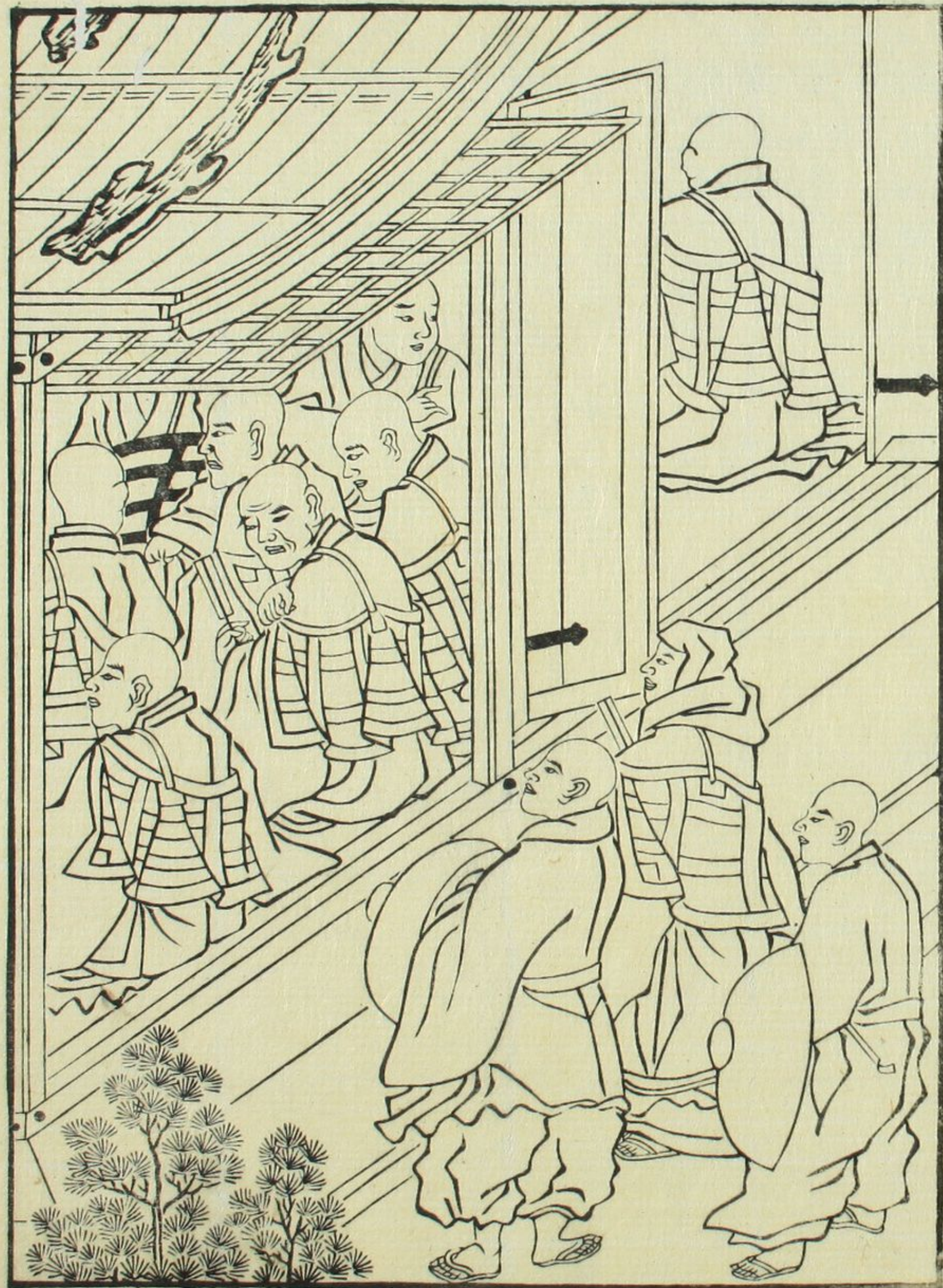
廿一

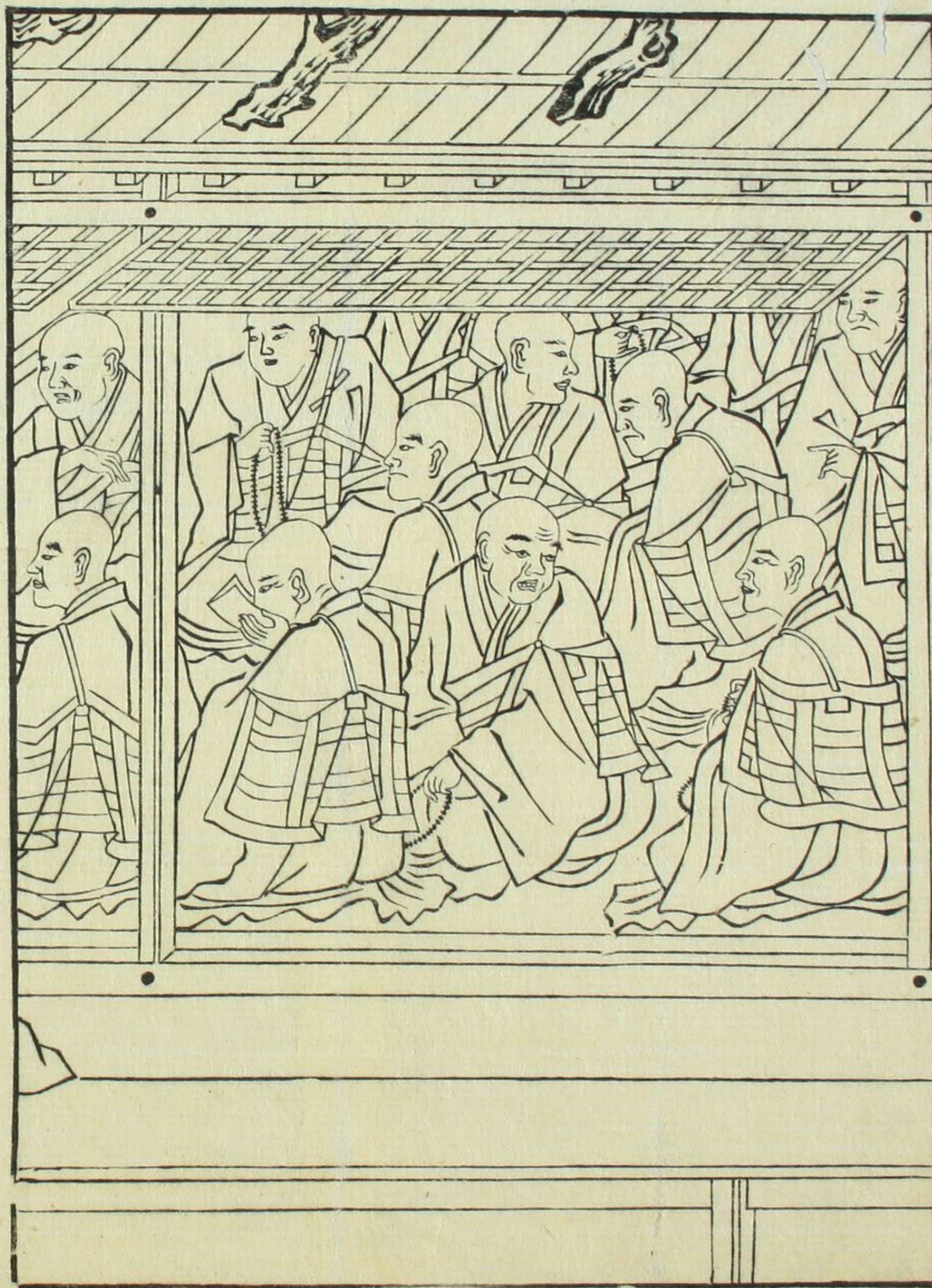
諸尊。満山乃護法。證明知見。——たよへ。源室

敬白
詮取

元久元年十一月七日 源室

廿一





月輪殿、此事歎然。座主大僧云、進せ
らる御消息云、念佛弘通の間、此事源空上人
起請消息等、山門より披露、後動靜如何を不
審。如風聞者、餘行をどうじべきより、勸進此條
不可然。云、此條よをきて、善導、此意此旨を
のぶるに似たり。然而、旨趣甚深也。行者れよふ
る。抑諸宗成立の法をのく、自解を專よ
して、餘教をたじとせ、世に弘行の常れ習。

先德、此故實也。此を異域よりとらへん。月
氏よ、すれから護法清辨、空有、此諍論震且
よ、又慈恩、妙樂、權實、此立破。是を我國より
尋せん。弘仁の聖代よ、戒律大小乃あり、と云
ありき。天曆乃御宇よ、諸法浅深の談あり。
八宗をたいて、定準とす。三國傳て軌範、
ありき。あ、と云、末世の邪乱をたえて、
諸宗の對論をためて、此てより、こり。

宗論なき跡をけづら。佛法に就いために安
全なり。就中浄土の一宗よをまきてハ古來此
行者偏よ無染無著此浄心成凝して専修專
念の一行よ住と他宗よ對して執論をこり
中餘教に比して是非を判べば獨出離を
稱といはれし往生をこくる直道也。但弘教
歎法のちしひ聊又其心たきにありし。
所謂源信僧都此往生要集乃中に三重の

問答をいづして十念此勝業をほび念佛此至
要なる事これ釋よ結成なり。禅林此永觀德
惠心よをよぶ所といへとも。行浄業をほぶら
撰とる此十因其心よる一なり。普賢觀
音此悲願をうんぐ勝如教信が先蹤を引く。
念佛乃餘行よすぐ此たること成證と彼時諸
宗此輩。惠学林をたし。禅定水をこつぬ。志
王心いへとも。惠心をもつらめし。永觀をも

罰^{ちり}に渡^り諸教も滅^{ちり}するごとく。念佛をさ^またむ
た^すらも。是^{すか}則^ち世^かとれほよんたを^らり^いゆ^へ也。
あるに今代^げ澆^き季^きよをよび。時^ど闘^と諍^{じやう}よ属^{ぞく}して。
能^{のう}破^へ所^{しよ}破^へと^こに偏^{へん}執^{しつ}よりた^らり。正^{しやう}論^{ろん}非^ひ論^{ろん}
これ喧^{けん}嘩^かよをよぶ。三^{さん}毒^{どく}うちらに催^{しよ}し。四^し魔^まほに
あ^らじも^がい^はつ^らる^らり。小^{せう}僧^{そう}幼^{えう}年^{ねん}乃^な
昔^{しやく}より衰^{すい}暮^ぼれ今^{いま}よ^いじ^るる^まりて。自^じ行^{ぎやう}を^る
そ^のれ^をこ^のへ^とこ^を本^{ほん}願^{げん}を^たの^こ。罪^{ざい}業^{ごう}に^て

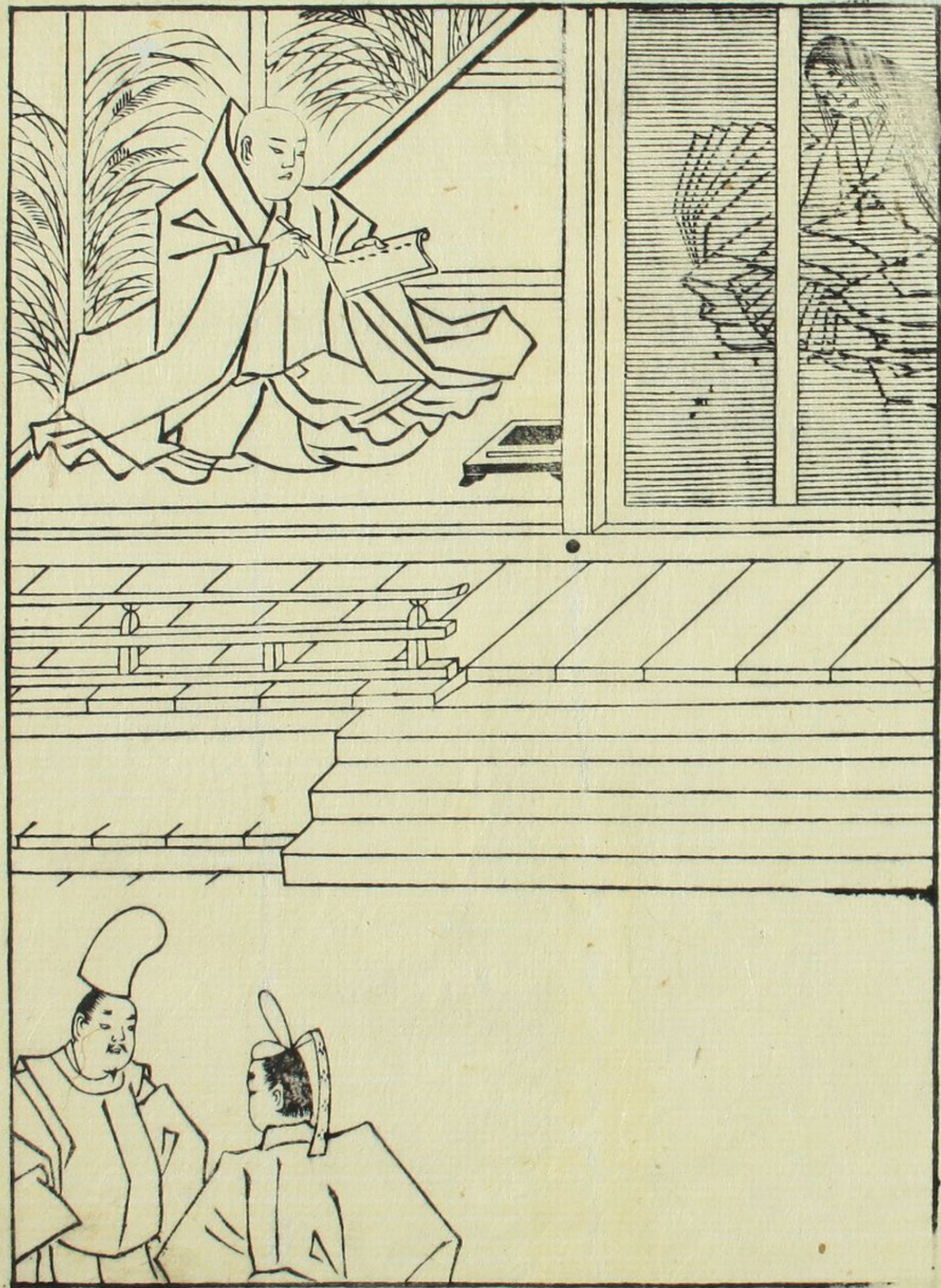
こ^いへ^も往^{じやう}生^{じやう}後^ご福^{ふく}ぶ^らう^をほ^をこ^こす^て
四^{しよ}十^{じゆ}餘^{じよ}廻^{くわい}れ^ん星^{せい}霜^{そう}を^をら^りい^よく^もい^はせ^ん
い^よく^もい^はせ^ん。數^{すう}百^{ひやく}萬^{まん}遍^{へん}れ^ん佛^{ぶつ}号^{ごう}法^{ぽう}と^らふ。頃^{ころ}
年^{ねん}ら^りこ^れる。病^{びやう}せ^り命^{いのち}あ^やう^し。歸^き泉^{せん}
ら^まに^あり。浄^{じやう}土^どの^{くわん}教^{きやう}迹^{じやく}。此^{こゝ}時^{とき}よ^あら^りて^滅
亡^{むつ}し^んと^らゆ。こ^れを^えん^こま^に法^{ぽう}聞^{もん}く^いく^ら
た^くい^して^志の^ごん。三^{さん}尺^{じやく}れ^ん蜂^{ちゆう}乃^の霜^{そう}肝^{かん}を^さま^ま
一^{いつ}寸^{すん}の^{しやく}燭^{しやく}じ^ゆは^この^ほ。天^{てん}よ^あま^りて^鳴咽^{えん}し^し。

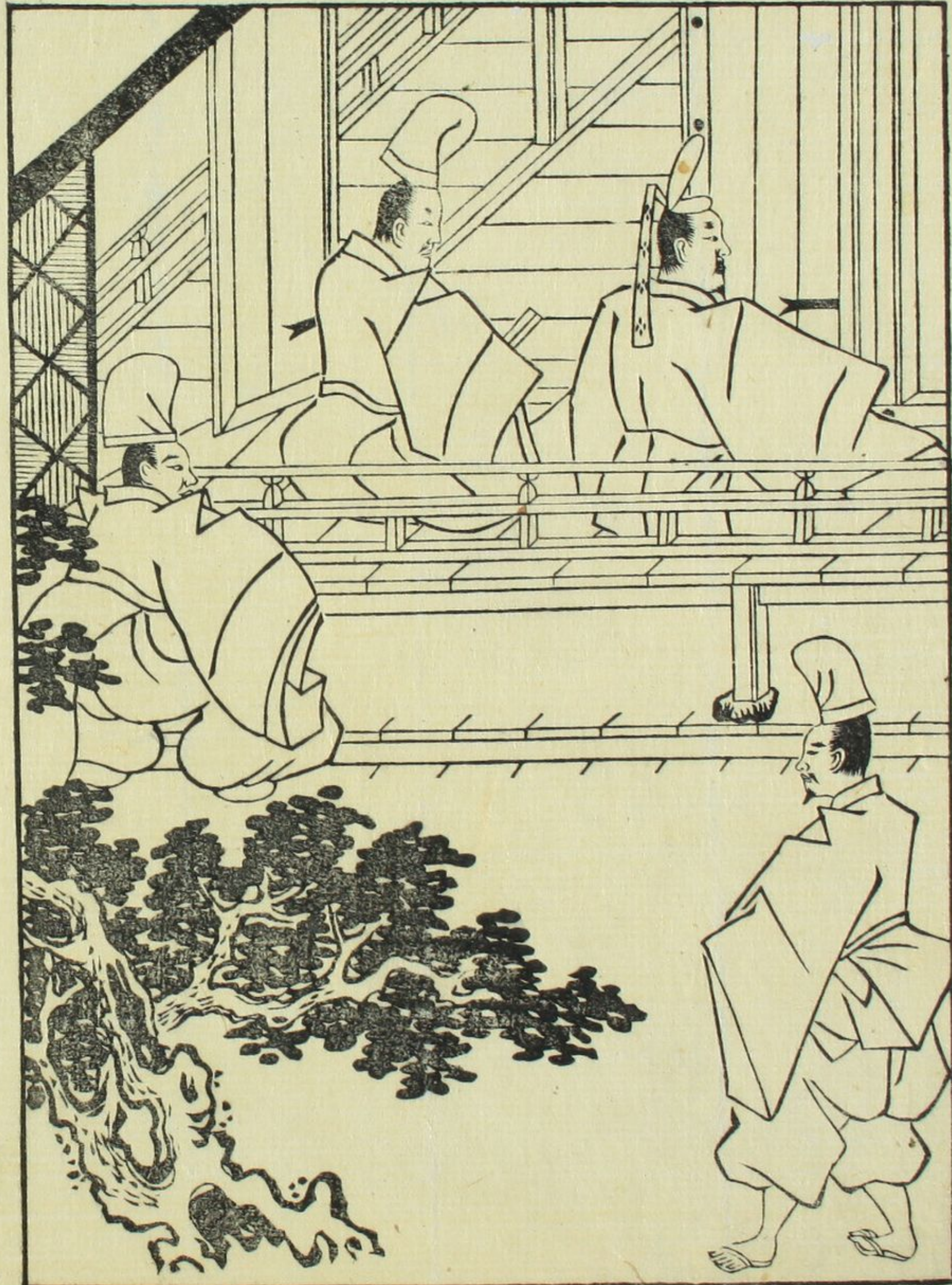
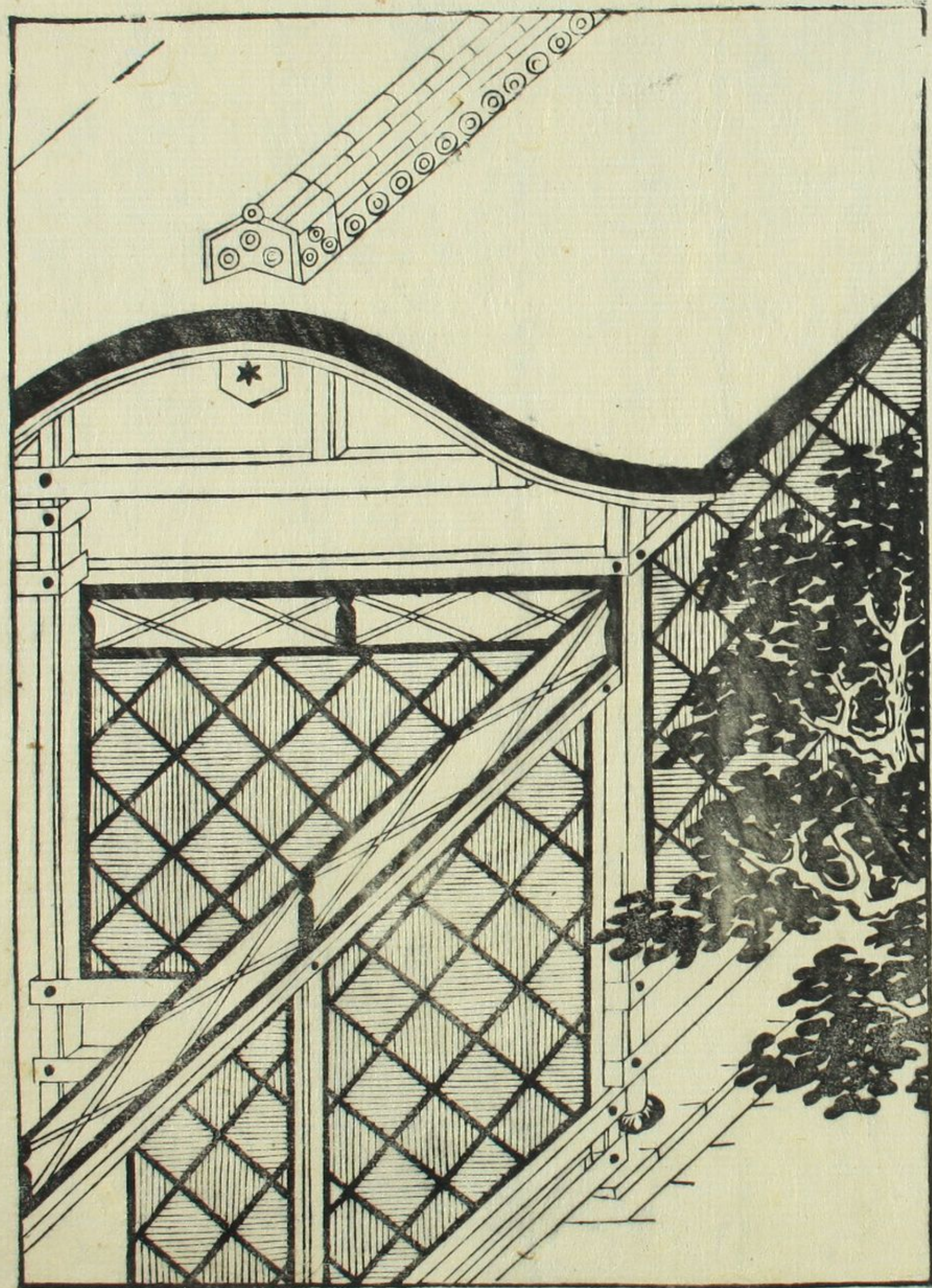
地をたゞまきて愁悶しゅうもんと。何況いんげん上人小僧じょうそうよをまきて。
出家の戒師かいしたり。念佛乃先達せんたつたり。罪つみたるを
して濫刑らんけいをまよひき。法ほふとあありて重科じゆうかあり
處きよでは。法ほふとああ身命みことを惜おぼへて。此小僧こそううらて
罪つみをうく處ところ。して師範しはんのこころ後あとはくのん
とわりの。して浄土じやうどの教けうをまよひんとわらふ
ゆくのみ。死罪しじ死罪しじ敬白けいぱく 取詮しゆせん

十一月十三日專修念佛沙門圓證

前大僧正御房

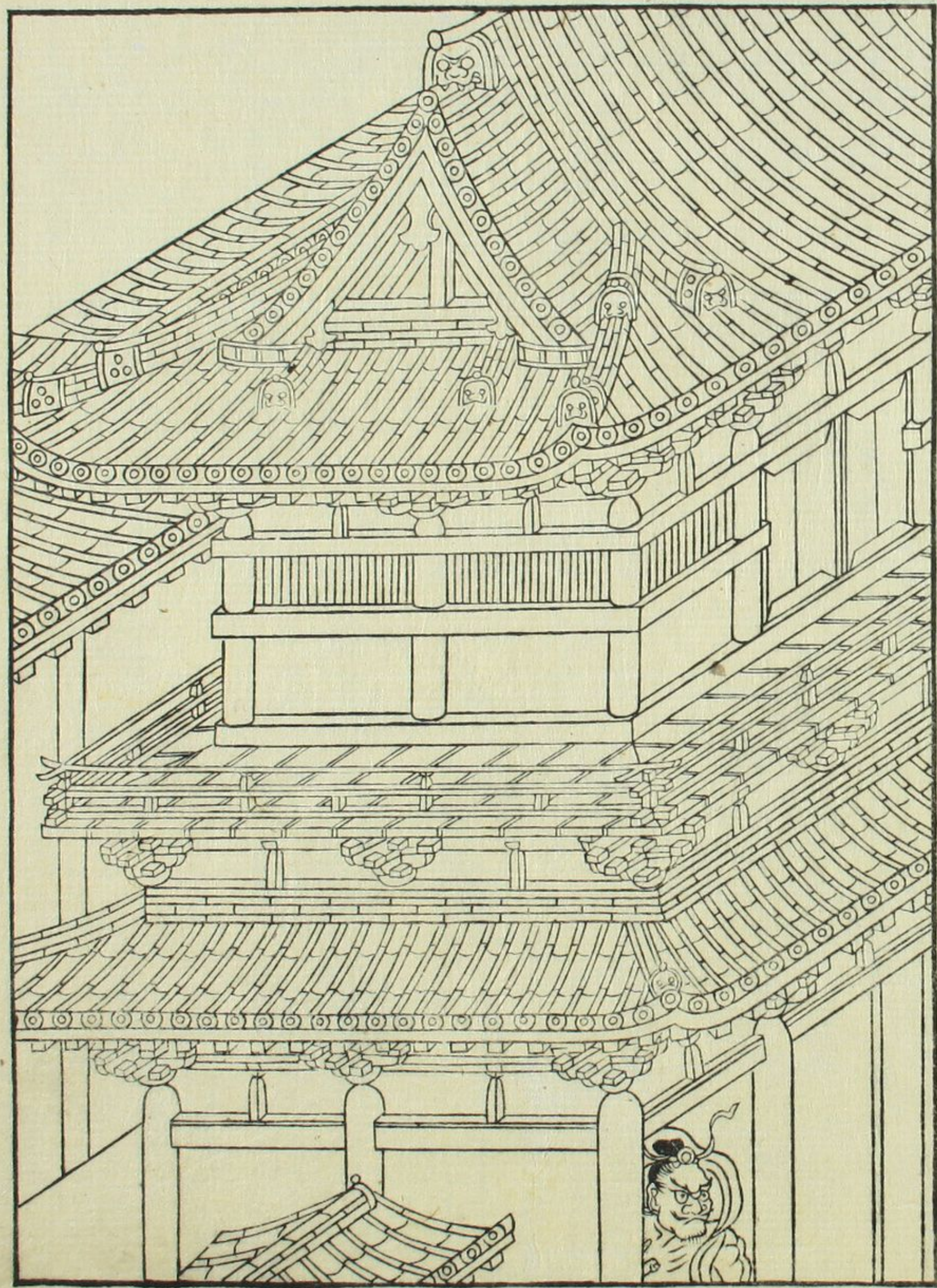
上人誓文じやくもんよをよび。禪問會通ぜんもんくわいつうをまよひけり
ゆひとれど。衆徒しゆだれ訖しやく詔みかどとまわにきり



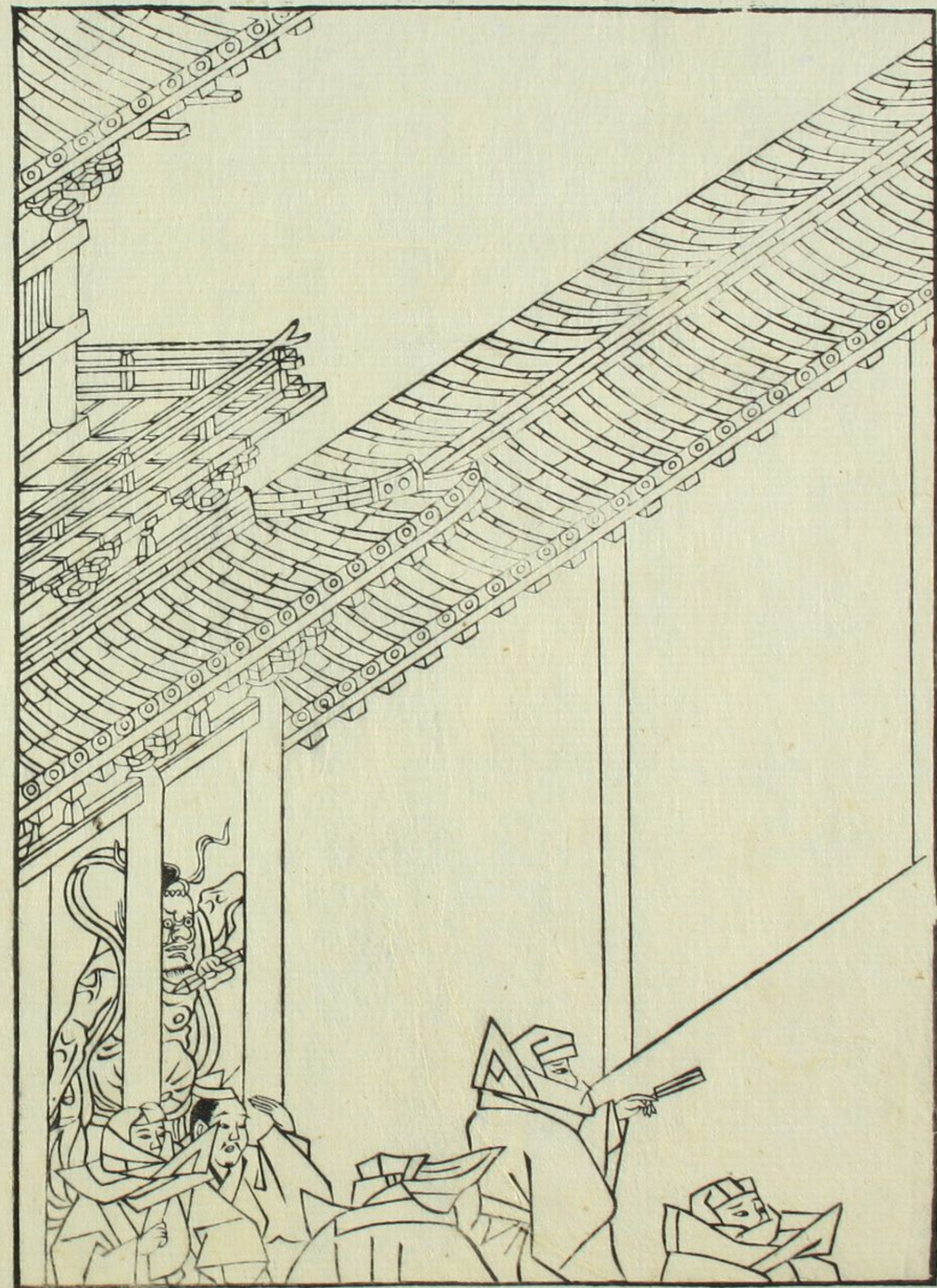


其後興福寺に鬱陶猶やまげ。同二年九月、
蜂起を以、白疏を以て之を。彼状を以て、上人
たつびよ弟子権大納言公继卿を重科よ處
て、るべきより、訴申。これよはきて、同十二月
廿九日、宣旨を下さ、此て云、頃年源宣上人都鄙よ
あまのひく念佛をよむ。道俗に多く教化よれを
いく。而今、彼門弟に、邪執の輩名を專
修よころをえらて、咎を破戒よころをいひ、是

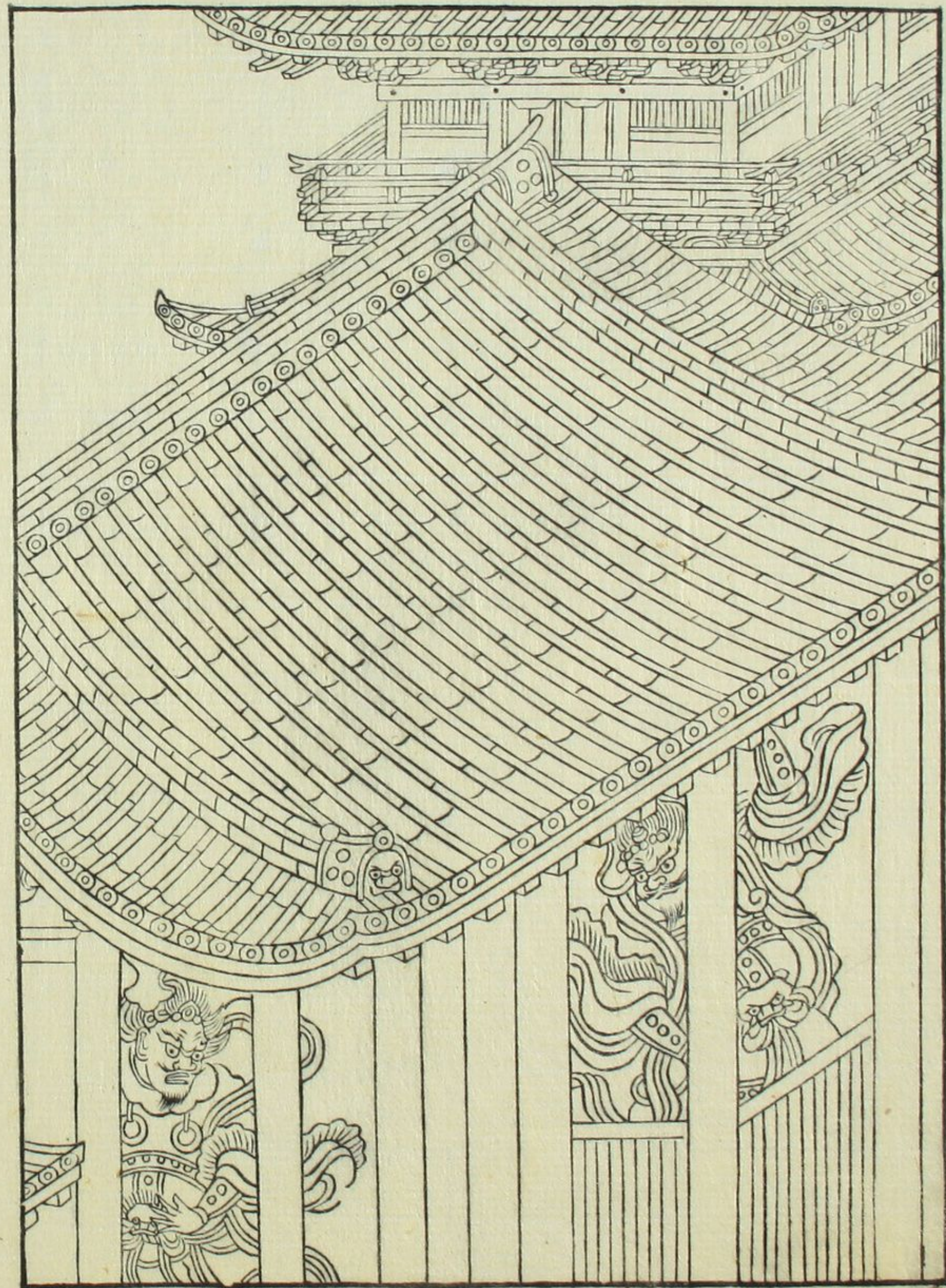
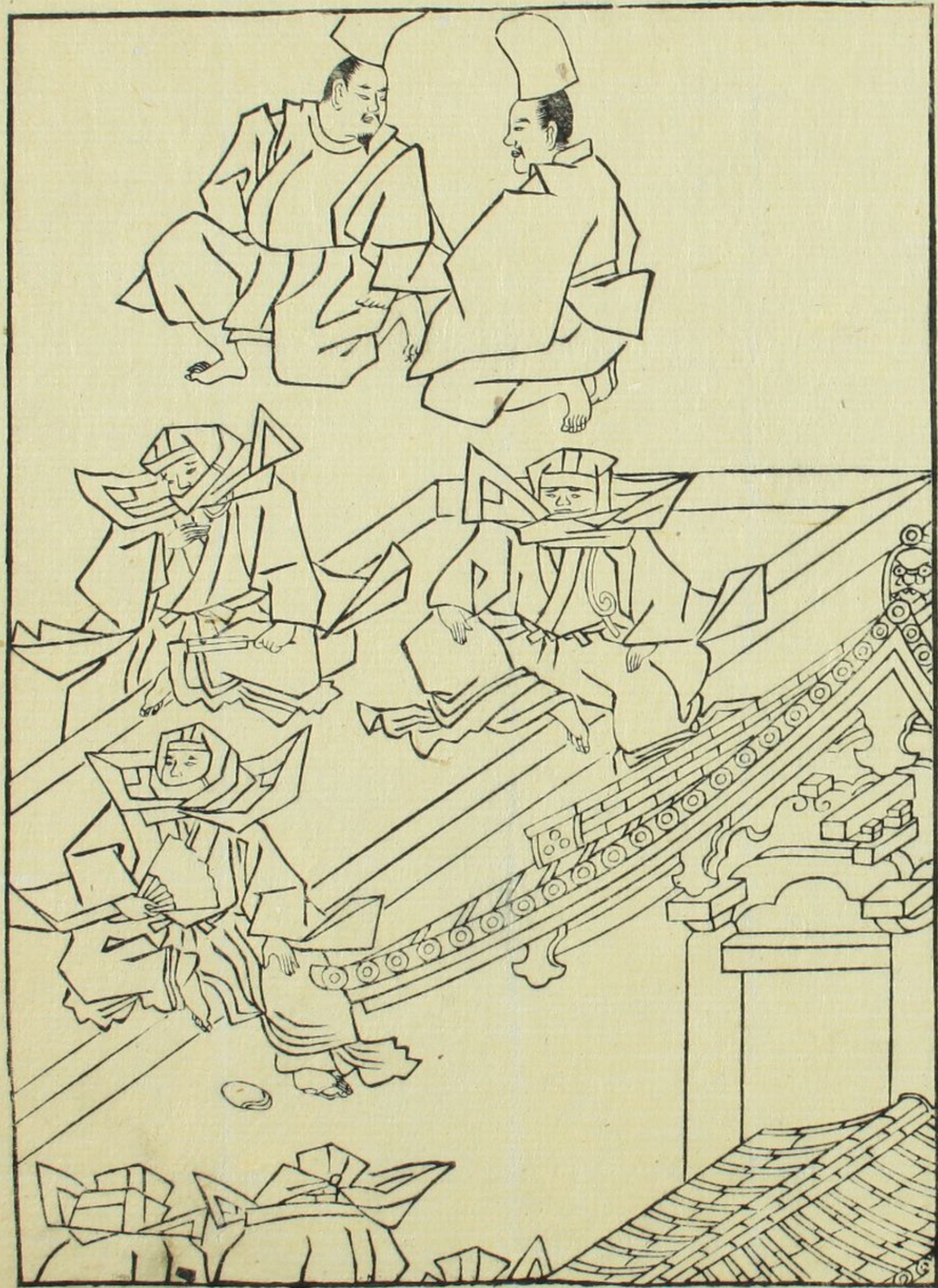
偏り門弟に、淺智よりわたりて、かへりて、
源宣が本懐よと、いひく。偏執を禁遏乃制り
守といぬと、刑罰を誘諭に輩よをり、
し、れ、此と云。取詮、君臣の歸依あさか、
ばり、い、ち、門徒に、邪説を制して、
上人よ、い、ち、ばり、
利



十一

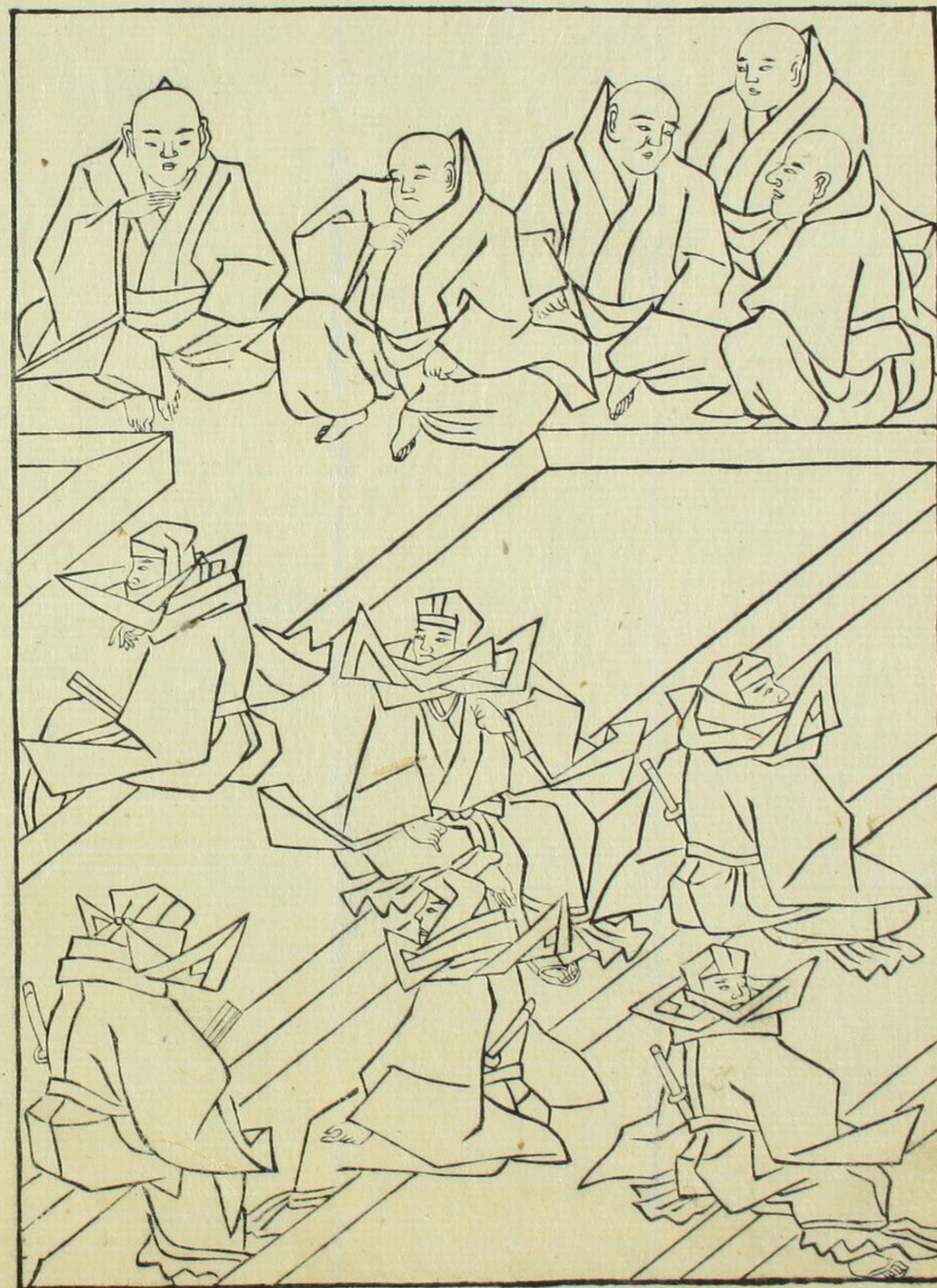


十二

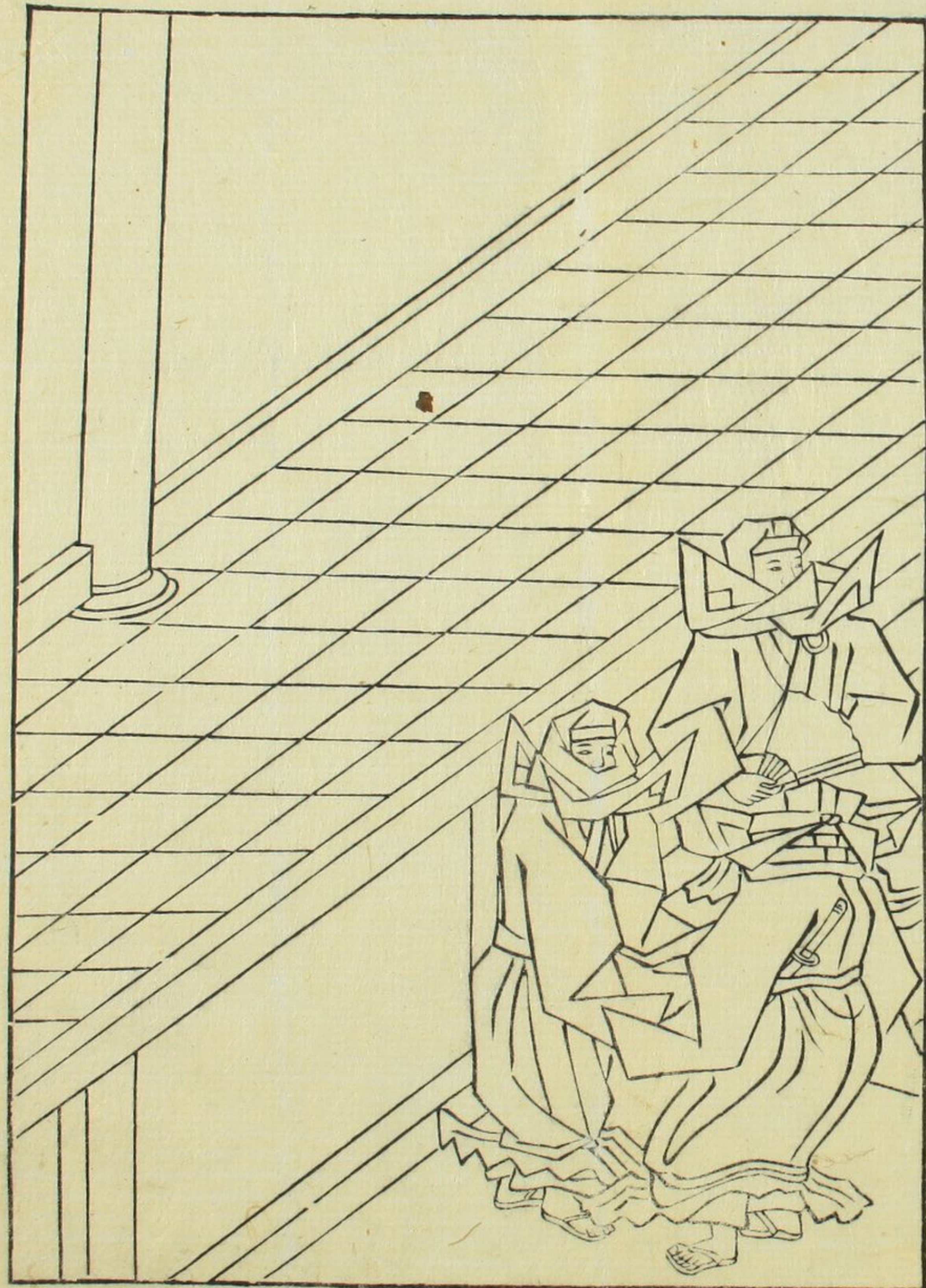




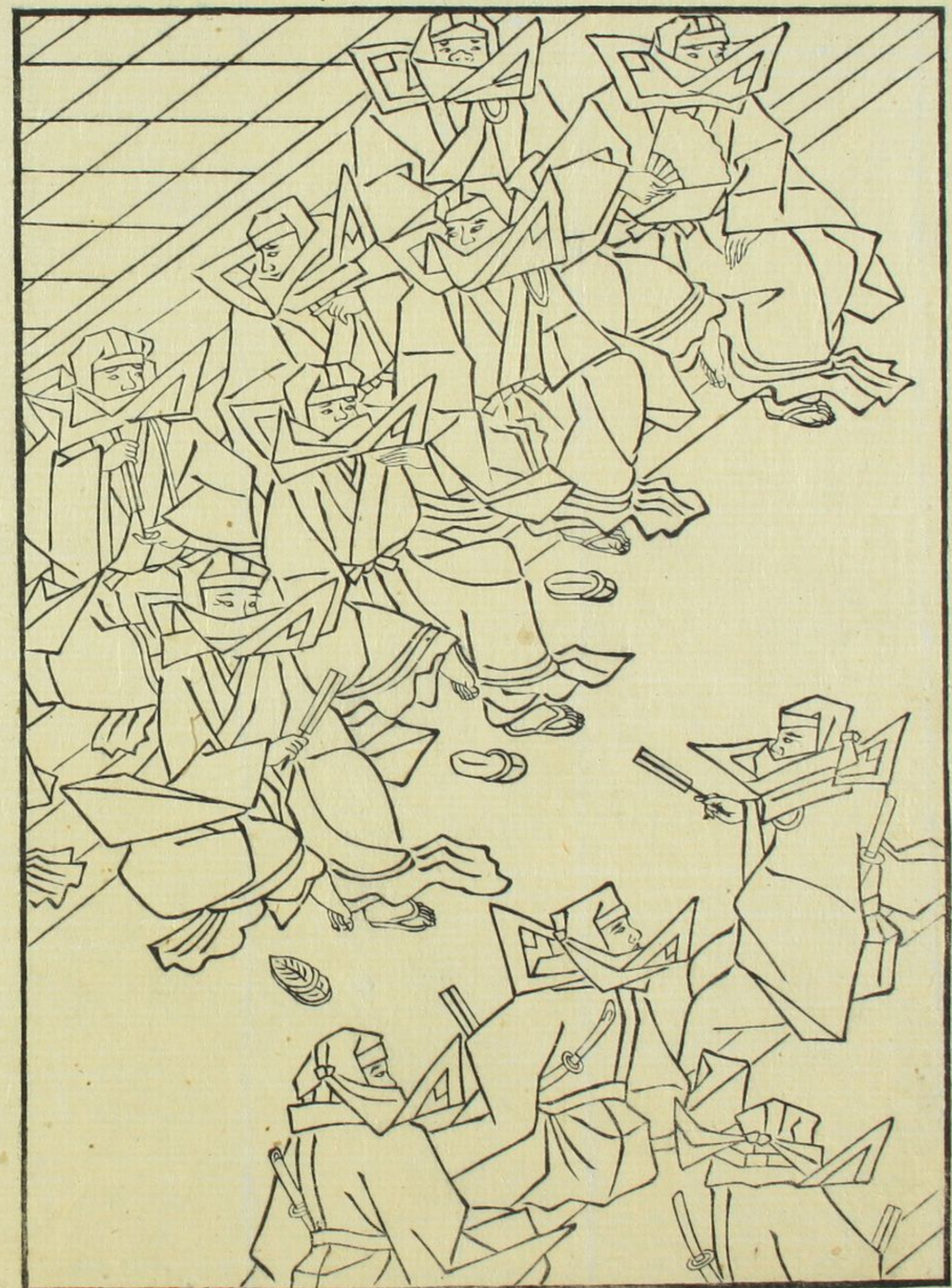
卷之四



卷之四



井上



井上

法然上人行狀畫圖第三十二

專修念佛之事。南都北嶺の樹爵陶よひまゝ

上人のべ申はらまじひ。それ謂ある歟乃より

謳歌し衆徒れいまこわらま。次第にゆるま

なりしうい。上人惣として生死をいひ佛道よ

入極まいたれ別して無智れ道俗男女れ念佛

するにありて。諸宗のちまゝしげとたむべし

さるじひ。聖覺法中に筆をさるゝ免。前

趣をのべら我々の状をこそ流浪三界のうら。
いけまされういよれをむきまての釋尊れ出世。
あいごりー。輪廻四生乃あひひこいけまこり
生後うけりて、如来れ説法をまこりけりし。
華嚴開講れむしるよをまのびにれは般若
演説の座よをけりて、就鷲峯説法れよ
よものぞや。鶴林涅槃のこごりよをい
れは、れ舎衛の三億乃家よをなごりてん。

あは地獄八熱れそこよやすもけんもつへ
く。れむべしこもはにいま。多生曠
劫をへても。むきまれこも人界よむきま。無量
億劫をくらわても。あひひがられ佛教よあへり。
釋尊れ在世よあひひ事いれ。こりこり
こも。教法流布の世よあひひ事得たるこ
これよ。れこびたり。たごへん同志あたるかめ。
よまのあひひ。けり。朝り

佛法の流布ふなり事きんめいを。欽明天皇あゆん乃志
たを志しりしめて十三年。之のえまゝ乃
や。冬十月一日。んぐりて佛法もり給ひ
し。それよりさまよひ。如来きんめいの教法きんめいを流布せ
ざりし。い。菩提ぼだいの覚路かくろいもまじり給ひ。こに
り給ひいられる宿縁しゆくえんよこすへい。いられる善業ぜんごふよ
りて。佛法流布ふれ時よじりて。生死しじ解げ
脱だつのまらなまきく事ことをえらるる。まらるる。い

あひごころしてあふ事こと得えたわ。いづに
何なにしや。いづにや。それん。いづに。いづに。或い
金谷きんこの花をまてあそびて。遅ちこたる春はるれ目を
ひれし。まら。或い南楼なんろうよ月をあふらりて。
漫まんこたる。殊ことれ夜をいづに。あふす。或は
千里の雲よ。いせて。山のうせきをあらわて。歳としを
あらわ。或い萬里乃たまに。うい。いづに。いづに。
くびをあらりて。日ひをあらり。或い嚴寒げんかんよ。いづに。いづに。

志のまて世路をまじら。或は炎天よりあせを
のぶしく利養ほえらぬ。或は妻子眷属より
纏はれて恩愛乃まじりなまらわがごと。或を
執敵怨類よあひて瞋恚はしむやじ事
なり。惣としてかくれごとくして晝夜朝暮行
住座卧時うしてやじ事なり。たほほしき
あにあくまて三途八難の業をうらぬ。あ
まといある文よ。一人一日申八億四千念。念と

申所作皆是三途業といへり。かくれごとくして
昨日をいづくにまきぬ。今日を又むねごとく
あけぬ。いまたひつちをいづきたひつちあ
うさんらすの。たまあたまよひく。栄花は
甲への風よちりやそ。ゆへよじよ命露ハ
あしたの日にまえなむ。これをはりて
ほひにうらん事候たひ。ごま候さう。ほ
して久しくあらん事をたを物。あひ。



無常^{むじやう}れ風^{かぜ}ひう^{ひう}びふ^{びふ}ま^まて有^ある^るれ^れゆ^ゆた^たく
ま^まえ^えぬ^ぬき^きい^いれ^れを^を曠^{くわう}野^やよ^よす^すて^てこ^これ^れを^をこ^こを^を起^起
山^{さん}よ^よを^をく^くる^るか^から^らひ^ひい^いは^はる^るよ^よこ^こけ^けの^のま^まり^り
う^うづ^づを^をれ^れた^たも^も志^しる^るい^い獨^{どく}た^たび^びれ^れう^うに^にま^まり^りよ^よ妻^妻
子^こ眷^{けん}属^{じゆく}の家^のよ^よれ^れづ^づも^もの^のれ^れハ^ハ汝^に七^{しち}珍^{ちん}萬^{まん}
寶^{ほう}ハ^ハく^くに^にこ^こえ^えま^まご^ごも^も益^{えき}も^もた^たり^りや^や身^みよ^よ
ま^まご^ごふ^ふま^まの^のハ^ハ後^ご悔^{かい}乃^の淚^{なみだ}也^{なり}は^はる^るよ^よ閻^{えん}魔^まの^の
廳^{どう}よ^より^りぬ^ぬき^きん^んは^はこ^これ^れ淺^{せん}深^{しん}を^をこ^こめ^め業^{ごう}れ

輕^{かろ}重^{おも}を^をん^んか^かへ^へる^る法^{ほふ}王^{わう}罪^{ざい}人^{にん}り^りと^とひ^ひて^てい^いく^く
人^{にん}ら^ら佛^{ぶつ}法^{ほふ}流^{りゆう}布^ふれ^れ世^せり^りじ^じよ^よれ^れて^てだ^だん^んを^を修^{しゆ}行^{ぎやう}
せ^せげ^げし^して^てい^いづ^づに^に歸^きり^りま^また^たも^もこ^この^の時^{とき}
よ^よハ^ハま^まり^りい^いづ^づこ^こる^るん^んと^とす^する^ると^とま^まり^り
出^{しゅつ}要^{よう}儀^ぎと^とめ^めて^てじ^じた^たり^りを^を三^{さん}途^とよ^よ歸^きる^る事^{こと}れ^れ
う^うれ^れを^をも^もく^く一^{いつ}代^{だい}諸^{しよ}教^{きやう}れ^れう^うら^ら顯^{けん}宗^{しゆ}密^{みつ}宗^{しゆ}大^{だい}乘^{じやう}
小^{せう}乘^{じやう}權^{けん}教^{きやう}實^{じつ}教^{きやう}論^{ろん}家^け釋^{しやく}家^け部^ぶ八^{はつ}宗^{しゆ}よ^より^りの^のれ^れ
義^ぎ萬^{まん}差^さり^りは^はく^くれ^れら^らく^く或^{ある}ハ^ハ萬^{まん}法^{ほふ}皆^け定^{ぢやう}乃^{なり}

宗をこま。或ハ諸法實相ハ心をあへり。或ハ五
性各別の義を了して或ハ悉有佛性ハ理を談し。
宗こよ究竟至極ハ義をあへり。各よ甚深
正義ハ宗を論じ。これこそ經論ハ實語れり。
如来の金言也。或ハ機をうのへくこれをして
或ハ時をうごめてさまざざをうへく強へり。いつれ
あへり。いれま。あつま。こそよ是非をりきよへ
か。このまを教これも教。たへり偏執を

いづく事なり。此説ハ修行せし。え那
こしくも生死をる度とべし。法のこく修
行せし。こそになり。菩提を證得とべし。
修せし。これに是非論と。たへり
同志ある人のいら。此淺深を論じ。こそ志ある
人。此ハ好悪をいへり。こそ。たへり
すべし。修行とべし。いれまも生死解脱の
こらたなり。こそよ。いれま。此を學する人ハ

これこそよき法誦とる人これこそよき
愚鈍のものをこれがためによきとひるふとく。凌
おの身にまじりてめにはよきとひるふとく。たましく
一法よれをひきて切をいさんとすれをすれ
から諸宗れあつていいたるひよきとひるふとく
諸教よりりて義を説きんとたのへ。二期乃
いのらよきとひるふとく。これ蓬萊方丈瀛洲と
いふなるこのよきとひるふとく。不死のこよりのありと

きけ。これを服してよれいのら法のべて漸に
習ふやと思へとて。だがぬ魚まゝをこれに
えは。まろつよ。秦皇漢武とまゝとて
御門。これをまゝとて。孫よはりつたり
か。童男氷女。よれうちにして年月法
をらまき。彭祖の七百歳の法。ひるふとく。これにて
いまれ時り。はるふとく。曇鸞法師を申
し。人こそ。佛法のよきとひるふとく。人の。

いのちのあゝの返期一がごとく佛法をなす
つんがために長生の仙の法をいはくつんはるま
時よ菩提流支と申三藏よりくま曇鸞
られ三藏の御まへり申すて申給屋うハ
佛法れ中よ長生不死の法。これ土乃仙經よ
すぎたるあやとくひ給をれん。三藏地に
はるまはるまての給く。このまよいつくれ
處よ長生の法あゝん。たろひ長年返得て

志ろく志れ給もはるま三有よ輪廻すと
の給てどれいら觀無量壽經をいひて。大
仙れ法也。これよらて修行すまこん。はるま
生死を解脱とてべとれ給ま。曇鸞これをは
たへて。仙經をくつらまらに火よやまてこれ
す川觀無量壽經よらて浄土れ行をま
給ま。そのら曇鸞道綽善導懷感少康
等にいもまて。これたれをはくつん給へり。その

こらなをたかりひいていづのちをのべて大仏の法戒
とらんとなをぬよ。又道綽禪師乃安樂集にも
聖道浄土此二門をききて然るにこれ心なり。且
その聖道門といぬ。穢去して煩惱を断
して菩提よいも也。浄土門といぬ。浄土に
いりてうごころて煩惱を断して菩提よ
いも也。いまこれ浄土宗にたみえてこれをいへ。
又觀經よあはれこころに業因一なりあはれ。
世六

三福九品十三定善。それ行ふれくくりわの
きてその業もらくよはれくくりわの
定善十三觀といふ。日想水想地想寶樹寶
池寶樓花座像想真身觀音勢至普觀雜
觀これ也。はぎよ散善九品といふ。一よ孝養
父母奉事師長慈心不殺。修十善業。二よりハ
受持三歸具足衆戒不犯威儀。三よりハ發菩提
心深信因果讀誦大乘勸進行者也。九品ハ一の
世六

三福業を開してその業因にあつたはぶさには
観經に見えたり。惣としてこそをいひ。定散
二善れ中に我れも往生の行あるべし。次
に我れよりて或いひまにもあ我れも有縁の
行よれをひきて功をうまひて。はれひん法よ
よりて行をさげより。はれしてこそ往生候
とて。はれにこそいひをたす事たうま。
いままはれしく自法よはまきてこそ我れをいひ。

中らよいは定善れ観門はすくにつららて
十三あり。散善の業因はよりくよりのまじく
九品あり。その定善れ門よいれんとて我れすれ
いち意馬あましく六塵乃境にうす。のれ散善の
門よのぞやんとすまじく。又心猿あそんで十惡れ
えぶにうはる。のれをまじやんとて我れも得とて。
こ我れをさめんこそすれもあつ。いしま下三
品の業因をさめん。十惡五逆れ衆生臨終よ

善知識よあひて。一聲十聲阿弥陀佛名号は
されへて往生はとてこれなり。これなんぞは
らぶかにあはらんや。この釋の雄俊といひ
人。七度還俗は悪人なり。いれちをわけてのら
獄卒閻魔の廳庭よ升てゆきて。南閻浮提
第一は悪人。七度還俗は雄俊。あはまひりて
らんぬらと申もれは雄俊申ていふく。いま
在生の時。觀無量壽經をさうくせん。五逆は罪人

阿弥陀ほらげの名號を十聲とて入へて極樂に
往生すとてさうくせん。これ七度還
俗といふも。いふは五逆をいはく。善報
すくはといふも。念佛十聲よすきたり。雄俊
え。地獄よたらん。三世は諸佛妄語のほかに
たら路へくと高聲よらげひらん。法王ハ
理りたれてたよの。あははかぬを。これを
たぐこ。弥陀いらひよらりて。金蓮よのせて

しうん。諸ま。いんや。七度還俗よをよのばしん
るや。いんや。一形念佛せんをや。男女貴賤行
住座臥臥え。諸も。時處諸縁を論で。是は
修するに。か。ど。乃至臨終よ。往生を願求
するに。そのたよりをえ。り。と。楞嚴は。先徳の
子。を。た。孩へる。ま。それる。や。又善導和尚
これ觀經を釋しての法。く。娑婆乃化主。そ
の請より。が。ゆへよ。ひろく。浄土は。要門をひ

らき。安樂は。能入別意の。弘願を。あ。い。は。は。その
要門といふ。と。それら。これ觀經は。定散二門是
也。定は。それら。た。を。ひ。を。や。め。て。も。て。心。を
こ。ろ。し。散は。す。な。ら。悪。を。廢して。善。を。修。次。
その二行を。免。ぐ。と。往生を。り。め。は。す。也。
弘願といふ。大經よ。と。く。と。一切善惡乃
九丈れ。じ。や。く。と。は。う。る。を。れ。阿。弥。陀。佛。は
大願業力よ。乘。り。て。増上縁と。せ。は。こ。い。ぬ。こと

下。又にはこの密意弘深にして教文はら
が。三賢十聖をうりてうらぐぬころよ
あ。信のいんや。信外の軽毛也。ら。り
旨趣をま。んや。あ。ひいてね。ん。ハ。釋迦ハ
こ。方。り。て。發遣。ハ。孫。隨。ハ。れ。を。よ。り
來迎。ハ。孫。ふ。こ。に。居。わ。う。こ。に。よ。り。あ。よ
ら。れ。る。ん。や。といへり。ま。う。れ。ん。定。善。散。善
弘願の三門をた。て。孫。へ。ら。その弘願といぬ。

大經云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。といへり。善導釋。ハ。て。の。孫。く。若。我
成佛。十方衆生。稱我名号。下至十聲。若不生
者。不取正覺。彼佛今現在。世成佛。當知本誓
重願。不虛。衆生稱念。必得往生。云。觀經ハ。定
散兩門を。と。記。を。い。り。て。佛。告。阿。難。汝。好。持。是
語。持。是。語。者。即。是。持。無。量。壽。佛。名。云。こ。れ。と。れ

はらさるゝの弘願乃らるなり。又た好まき經の
真身觀よハ。弥陀身色如金山。相好光明照十方。
唯有念佛蒙光攝。當知本願最為強。云又此
さまの弘願乃ゆへなり。阿弥陀經よいづく。不可
以少善根福德因縁。得生彼國。若善男子善
女人。聞說阿弥陀佛。執持名号。若一日。若二日。
乃至七日。一心不乱。其人臨命終時。心不顛倒。
即得往生。云云。是まきれ文なり。六方よをのく

恒河沙乃佛あり。廣長れ舌相をいづて。
あまよく三千大千世界にたはひて。誠實れと
かり信ぜよと證誠し強へり。此又あまの
弘願のゆへ也。又般舟三昧經よりいづく。跋陀和
菩薩阿弥陀よといひて。いづく。いづちる法を行
トてり。かれとよく。じやうへきと。阿弥陀ほとけ
の終るく。りづき。はる来生。ぞんとたをらんも。此
はよに我名を念ひて。体じとれ。いづく。いづく



てくして。わづかに。来生すること。候う。此
の。候へり。よき。又。弘願の。ひび。候。や。け。う。う。
れ。候。ゆ。り。又。五。臺。山。乃。大。聖。竹。林。寺。れ。記。り
い。く。法。照。禪。師。清。涼。山。よ。の。ぼ。わ。て。大。聖。竹
林。寺。に。い。く。候。う。て。二。人。乃。童。子。あり。一。人。を。六
善。財。とい。ひ。一。人。を。難。陀。とい。ぬ。これ。二。人。乃
童。子。法。照。禪。師。を。と。ら。び。ま。て。寺。乃。う。ら。い。よ
い。ま。て。漸。く。よ。講。堂。よ。い。り。て。これ。ハ。普。賢

菩薩。無。數。れ。眷。属。り。圍。繞。せ。て。座。し
候。へ。り。文。殊。師。利。ハ。一。萬。れ。菩。薩。よ。圍。繞。せ。て
ま。て。座。し。候。へ。り。法。照。礼。し。て。い。ひ。ま。て。ま。の。り
り。て。云。未。法。の。九。丈。ハ。い。じ。ま。れ。法。を。修。す。べき。
文。殊。師。利。答。て。の。候。く。く。だ。ん。ぢ。す。ぞ。よ。念。佛
せ。よ。い。よ。ま。ゆ。さ。う。は。是。時。也。と。法。照。又。こ。い。て
申。ら。く。も。ま。さ。に。い。は。ま。を。う。念。ず。べき。と。文。殊
又。の。う。ま。く。と。れ。世。界。候。す。は。て。西。方。り

阿弥陀佛より南無がけほけけよはり願
ふくまのしやんなんぢまゝに念ずへしと。
大聖文殊法照禪師よまれあまりの孫ひ
事也すべくひろくをいへど諸教り
あまひく修了るる法門也。はぶたにあまに
いとほあし。志るをこれる念佛のよにいろ
まらるるにらして佛法うせぬとす。諸宗の
学者難破をいひよらして。人おほく念佛乃

行を廢とす。こいひまぶ心えげんぬら。
佛法いこれ萬年也。うれと神たりまも佛法
擁護れ諸天善神まもり孫ゆへよ。人の力にてハ
うなよへう。守屋れ大は。佛法を破滅せん
とせし。法命いまはまざして。いかに
はるる。いんや無智れ道俗。在家の
男女れ力にて念佛を行とるにらして。法相三
論を隱没し。天台華嚴を廢退とる事れ。

ういあるべき。念佛を行ぜしめてあたふとこれ
とりのごう一宗をも興隆とくすらん。おまじり
ぶくに念佛の業を廢したるものか。里よりて
まうくと此諸宗れをぎろ。彼をしろくする。今此
まうとれいこまにほきなる損なりあつたや。
諸宗れらうまうとれをとりし。南都北京の學者。
两部の大法をほくんとする。本寺本山の禪徒。
百千萬れ念佛世よひるよりたらるも。本宗は

あつたじべきにあつた。又佛法うせたらん。と此
とて念佛を廢せん。念佛いこ此佛法よあつた
とや。たとへん虎狼の害はよなく。師子よ
ひいてり。殺んぐこと。餘行を謗し。念
佛を謗せん。おれくこ此逆罪也。とれねはほ
うまに害せしむらん。師子よ害せしれん。とま
かたし。死とく。これをも謗すべし。此のま
なもそひひる。こまにこれ佛法也。たごひよ

偏執するところれうま。像法變疑經よりいふく。
 三学此行人だぐひり毀謗して地獄り
 いるところれやれとていへり。又大論にいふく。
 自法を愛染とるゆへり。他人の法は毀皆す
 まぬ。持戒乃行人たりといへり。地獄此苦は
 まぬ。色欲といへり。又善導和尚乃此強く。
 世尊說法時將了 慇懃付属称陀名
 五濁増時多疑謗 道俗相嫌不用聞

見有修行起瞋毒 方便破壞競生怨
 如此生盲闍提輩 毀滅頓教永沉淪
 超過大地微塵劫 未可得離三途身
 といへり。念佛を修せんまこれ餘行をさるる
 處に於て一に稱念しては稱念は悲願に
 そじく過まゆへ也。餘行は修せん者之念佛を
 うへて過まゆへ。又諸佛の本誓よたふゆへ也
 なるをいま真言止觀に窓乃よりいへり。念佛は

行をさぐる。一向專念此床のうへよ。諸餘此
行はる。一。此に我と偏執の心を立て義
理を了ておぼむ。いよをのく。是非れもひり
住して會釋をたは。あに。ま正義り。これ
の非や。これに佛意よろじ。た。た。よ
又難者のい。今來此念佛者私乃義は
たて。惡業をた。此。乃本願を信せ
らる也。數遍はる。一。一念の往生は

ぐふ也。行業は。一念十念よ。ち。り。わ。へ。
か。る。が。ゆ。へ。り。數。遍。を。い。じ。ゆ。る。は。惡。業。を。い。
四重五逆をじ。故ゆへり。諸惡を。か。
ゆ。る。は。と。い。へ。り。此。義。ま。る。を。ま。る。べ。く。は。
釋尊此說法よ。見え。善導乃釋よ。あ。は。
ま。か。れ。ご。く。存。ぞ。ん。ま。の。惣。と。て。諸。佛。の
御心よ。た。く。へ。り。別して。此。乃。本願り
か。た。ふ。べ。く。は。五。逆。十。惡。乃。衆。生。此。一。念

十念よらりて。れくく往生すといぬい。ま
観經のあまううれる文也。ちくく五逆ごぎやくを以
てして十念をされしよ。十悪をくして一念を
申せとすしじよよいあし。此れ十重戒を
えらく十念をとりしよ。四十八輕しやくをゆるりて
四十八願をたのじし。心よちくく心願しんげんが所
ちりたほよそいげま。此れ行をそくくにするを。
心よ戒行かいぎょうをたえちりて。浮囊うぶくらをちりて。この

しゆくに。身みれ威儀ゐぎよ油鉢ゆはつをうる物ものをけい。
行ぎょうして成就じゆうじゆで法ほふといぬ事ことなり。願げんして
圓滿げんまんで法ほふといふことあり。あるを身みれちり戒かいの
四重戒しじゆうかいをく。あるし十悪じじうあくを行ぎょうと。此こを
ちりて。此こを行ぎょうと。一人ひとりとしてまこと乃すなはち戒かい
行ぎょうを具ぐしたる者ものなり。諸しよ悪あく莫な作さ諸しよ善ぜん奉ほう
行ぎょう。三世さんせいれ諸佛しよぶつの通戒つうかい也。善ぜん法ほふ修しゆするもの
善趣ぜんすれ報ほうをえ。悪あくを行ぎょうする者ものハ惡道ごうだうれ果くわを

感^{かん}とぬ^ぬといぬ^ぬこの因果^{くわいぐわい}れ道理^{だうり}をさ^さげ^げら^らを
ま^まう^うば^ばら^らの^のこ^ころ^ろ。そ^そう^うづ^づめ^めて^てい^いふ^ふよ^よあ^ある^るの^の理^り。
あ^あら^らに^にご^ごを^をあ^あよ^よま^ます^すよ^よづ^づい^いて^て悪業^{あくごふ}を^をこ^こめ^めよ^よ。
縁^{えん}よ^よら^らま^まして^{して}念佛^{にふつ}を^を行^{ぎやう}。往^{じやう}生^{じやう}返^{げん}期^きす^すへ^へ。
悪^{あく}人^{にん}を^をす^すて^てこ^ころ^ろを^をま^まじ^じら^らん^ん。善^{ぜん}人^{にん}に^にぞ^ぞま^まじ^じら^らん^ん。
法^{はふ}を^をね^ねら^らる^るも^もい^い本願^{ほんがん}返^{げん}ら^らる^るご^ごま^まと^とい^いこれ^{これ}宗^{しゆ}よ^よ。
ま^まろ^ろく^く存^{ぞん}ぞ^ぞら^らる^るこ^ころ^ろ也^や。決^{けつ}よ^よ一^{いっ}念^{ねん}十^{じゅう}念^{ねん}に^に。
よ^よら^らて^てが^がれ^れこ^ころ^ろに^に往^{じやう}生^{じやう}す^すとい^いぬ^ぬ。釋尊^{しやくそん}れ^れ金言^{きんごん}

なり。觀經^{くわんぎやう}の^のあ^あま^まさ^さら^らの^のれ^れる^る文^{ぶん}な^なら^ら。善導^{ぜんだう}和^わ尚^{じやう}の^の。
釋^{しやく}よ^よい^いく^く下^げ至^し十^{じゅう}聲^{しやう}等^{とう}。定^{ぢやう}得^{とく}往^{じやう}生^{じやう}。乃^{なほ}至^し一^{いっ}念^{ねん}。
無^む有^{ゆう}疑^ぎ心^{しん}。故^{ゆゑ}名^な深^{しん}心^{しん}とい^いへ^へり。又^{また}い^いく^く行^{ぎやう}住^{じゆ}座^ざ即^{すなはち}。
不^ふ問^{もん}時^じ節^{せつ}久^{きう}近^{じん}念^{ねん}と^と不^ふ捨^{しゃ}者^{しや}。是^せ名^な正^{ぢやう}定^{ぢやう}之^の業^{ごふ}。
順^{じゆん}彼^か佛^{ぶつ}願^{げん}故^{ゆゑ}とい^いへ^へり。ま^まろ^ろに^にれ^れん^ん信^{しん}返^{げん}一^{いっ}念^{ねん}り^り。
い^いち^ちろ^ろと^とわ^わて^て行^{ぎやう}を^をい^い一^{いっ}形^{ぎやう}よ^よら^らに^にげ^げじ^じら^らと^と。
す^すじ^じる^る也^や。弥^ぢ陀^たの^の本願^{ほんがん}を^を信^{しん}と^とて^て念^{ねん}佛^{ぶつ}れ^れ功^{こう}返^{げん}。
は^はら^らの^の運^{うん}心^{しん}年^{ねん}ひ^ひこ^ころ^ろに^にた^たん^んど^ど願^{げん}力^{りき}を^を信^{しん}せ

すといぬへさや。とらべて薄地の九丈。弥勒の浄土に
ひまの事。他力よあつた。いこれ道たえし。も
る事也。たほらそ。十方世界に諸佛善逝。穢
土に衆生を引導せんがために。穢土よりして
正覚をたれへ。浄土に衆生を化せんがために。ハ
浄土よりして正覚をたれぬ。阿弥陀佛ん
浄土に。して正覚を成く。土も穢土に衆生は
引導せんといぬ。願をたて。給へ。その穢土に

して正覚をたれぬ。ハ随類應同。其相を志
め。す。が。ゆへ。よ。い。の。ち。た。が。を。と。り。て。こ。く
没槃よ。い。わ。ぬ。ま。る。浄土よりして正覚をたれん。
報佛報土よりして地上の菩薩の所居也。未
断惑の九丈。た。ら。に。じ。ま。る。事。あ。り。す。
ま。る。を。い。よ。浄土に在。嚴。佛道を修行す。
本意ハ。ま。と。造悪不善。れ。も。ぐ。ハ。輪轉。さ。ハ
より。た。る。人。を。引。導。し。破戒浅智。れ。を。め。

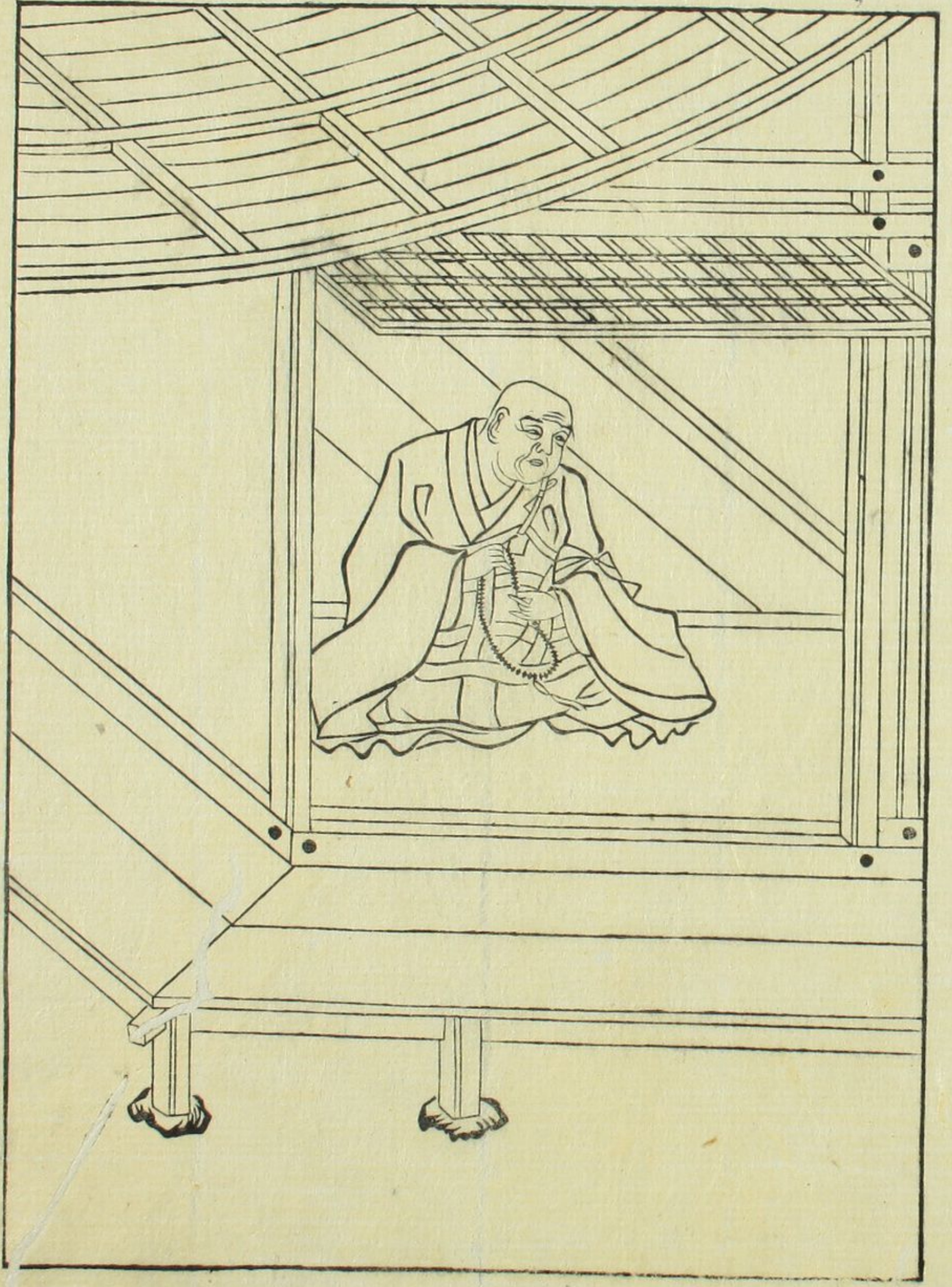
出離の期を人々をあらはれしめんがため也。さうして
それ三賢を證し。十地をさしめたる。久行の
聖人深位の菩薩。六度萬行を具足し。諸
波羅密を修行して。じやうとといふ。これ
大悲の本意よあり。此の乃酬因感果の事
なり。大悲大悲の御心のうらに思惟して
年序をくりに法をりて。星霜五劫よをよべり。
まゝに善巧方便をめぐり。思惟し

強へん。まゝもわき別願をえて浄むよ居して。
薄地底下に衆生を引導すへ。それ衆生は
業力よらりて。じやうとといふ。かゝる處し。
これとて。べし。衆生のたえよ。永劫の修行を
なす。僧祇の苦行をめぐり。て萬行萬善の
果徳圓滿し。自覚覚他の覚行窮満して。
その成就でんとす。それ萬徳無漏。一切の功
徳をりて。げん名號とて。衆生よとて。へ

志めん衆生も〜これよをいて信をい〜
稱念せい。しが願り〜こ〜くじよ々事を
うべ〜名號をされ〜しよるべき別願をお
こ〜ぞれ願成就せ〜佛よれるべき〜ゆへ
た〜の願も満足せ〜永劫をさ〜も
い〜正覺をさ〜。た〜。未來惡せれ衆生
驕慢懈怠り〜。我よをいて信をた〜此事
か〜へ〜。一佛二佛のごま願り〜よをさ〜

か〜い〜心をと〜ん事法縁〜い〜
十方に諸佛よ〜こ〜。これ願法稱揚せ〜れ
お〜しよ〜ん〜ら〜いて。第十七の願り。
設我得佛。十方世界無量諸佛。不悉咨嗟稱
我名者。不取正覺。〜して。願ひ〜。は〜よ。第
十八の願。乃至十念。若不生者。不取正覺。と
〜して。願へ〜。の〜。無量に諸佛よ稱揚せ
ら〜た〜しよ〜ん〜た〜。願成就する

ゆへよ。六方よなまのく恒河沙乃ほけけきー
 くて廣長乃舌相を出してあまゆく三千
 大千世界におやひて。されおなしく。此事を
 備ふれ。里と證誠一。強へり。善導。これを釋
 しての強くき。これ證よ。あわてじ。あま
 事得ら。い。六方。諸佛の。あへ。強へる。舌口より
 いて。あわて。乃ら。ほ。あ。よ。口。に。く。わ。い。強。強
 して。自然よ。や。あ。強。あ。強。ん。と。の。強。へ。り。と。



是は信ぜらんまのいどれんら十方恒沙の
諸佛の御志をせざる也。よくよく信どへし。
一佛二佛其御言を承らんたよとあり。いに
いんや十方恒沙の諸佛を也。大地微塵劫を
超過すといまじ三途の身を承られんべし
けとの後へ。弥勒其四十八願といふ。無三悪
趣不更惡趣乃至念佛往生等其願。此なり。
すべて四十八願の中に。いづこも願うべし

成就し殊に願あるべき願として不取正覺と
ちついでいふすべし。正覺をたらし遂へる故也。
然を無三惡趣の願を信ぜしめて。其國よ
惡道ありといふ者いたり。不更惡趣の願を
信ぜしめて。其國よの衆生いのちをたつて
のち。又惡道よかへるといふ者いたり。悉皆金
色の願を信ぜしめて。其國よ衆生は。金
色なるもあり。白色なるもありといふ者ん

なり。無有好醜の願を信ぜしめて。其國よの
衆生いづれも善惡あり。つるまも善惡ありと
いぬ者いたり。乃至天眼天耳。光明壽命をよみ
得三法忍の願いしるまで。こまにをいてう
たぐひをたし者いまま。侍りしりて。弟十八
此願よをいて。念佛往生の願いしるを信ぜ
ばる也。この願をうしる。餘の願をも信ず
る。餘の願は信せんと。此一願はうたぐひ

法藏比丘。いまはほけよたり。法
のといふ。また謗法よたり。なり。ま
又たり。法へりといふ。い。これ願をうごふ
法もや。四十八願の弥陀善逝ハ。正覺後十劫よ
られへ。法へり。六方恒沙の諸佛如来ハ。舌相を
三千世界よのへ。法へり。たま。これ信を信ぜざる
法もや。善導。これ信を釋しての法も。化佛
報佛。若一若多。乃至十方よ。徧して。ひんを

ゆ。ま。法も。ま。あ。ひ。十方り
た。これ事。虚妄なり。この法も。ま。ま。
畢竟。一念疑退の心をた。こ。ま。
の法へり。ま。法をいま行者たち。異学異見の
ため。ま。ま。ま。法も。ま。ま。法。い。に。法。ま。
報佛。化佛。法の法も。ま。ま。ま。これ行法
す。ま。ま。ま。法をこ。ま。ま。ま。ま。ま。法
法も。智恵なら。法も。聖教をひ。ま。ま。ま。これ

財寶たんとせん。布施を行どるなり。わ
たしむじう。彼羅奈國よ。太子ありき。大施
太子に申き。貧人をあつきて。せめて。誠ひ
きて。せむらく。れも。物を。出して。あつて。給よ。
たつて。はく。まら。せ。ま。づ。一。き。者。いつ。く。べ。し。
こ。た。た。子。う。ま。れ。あ。り。に。如意寶珠。あり。き。
海よ。ゆき。て。せ。と。あ。つ。て。ま。づ。一。き。身よ。寶を
あ。つ。へ。ん。と。ら。ひ。て。龍宮よ。ゆき。給。り。龍王

お。ご。ろ。ま。あ。わ。一。ま。て。た。が。ろ。け。の。人。よ。い。あ。
は。い。ひ。く。ま。づ。一。む。ひ。て。た。つ。れ。に
と。へ。た。て。ま。つ。た。し。あ。つ。て。ま。づ。一。き。給。り。
何事。を。り。め。給。ぞ。わ。と。へ。ん。太子。の。給。り。
圖浮提の。人。ま。づ。一。く。て。ら。し。事。は。は。
王乃。ま。づ。中。の。寶珠。を。い。ん。が。た。め。に
ま。づ。一。き。の。給。へ。ん。王。れ。い。く。ま。づ。一。は。七。日
一。く。て。ま。づ。一。き。給。養。給。り。給。其。後

たう後をてしうんといぬ。太子七日後海へ
もまをえ給ぬ龍神りゆうじんとこりなむわたくし
まゝすれいら本國のまゝにいかりぬまて
まゝく龍神はげまていりて。たたまん
海中うみちうはもうらや。あまをらら海へしてぞ。まゝる
海うみまをららじ。海神うみじんへよまらて。太子乃海
まへまをらりていりて。君世よ海ま成玉を
え給く。いりて見せ給く。太子こ

たう後をてしうんといぬ。太子七日後海へ
もまをえ給ぬ龍神りゆうじんとこりなむわたくし
まゝすれいら本國のまゝにいかりぬまて
まゝく龍神はげまていりて。たたまん
海中うみちうはもうらや。あまをらら海へしてぞ。まゝる
海うみまをららじ。海神うみじんへよまらて。太子乃海
まへまをらりていりて。君世よ海ま成玉を
え給く。いりて見せ給く。太子こ

生死の法く〜がいにをまはなはなは〜んん〜ん
思ふに〜んせんせん水た〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

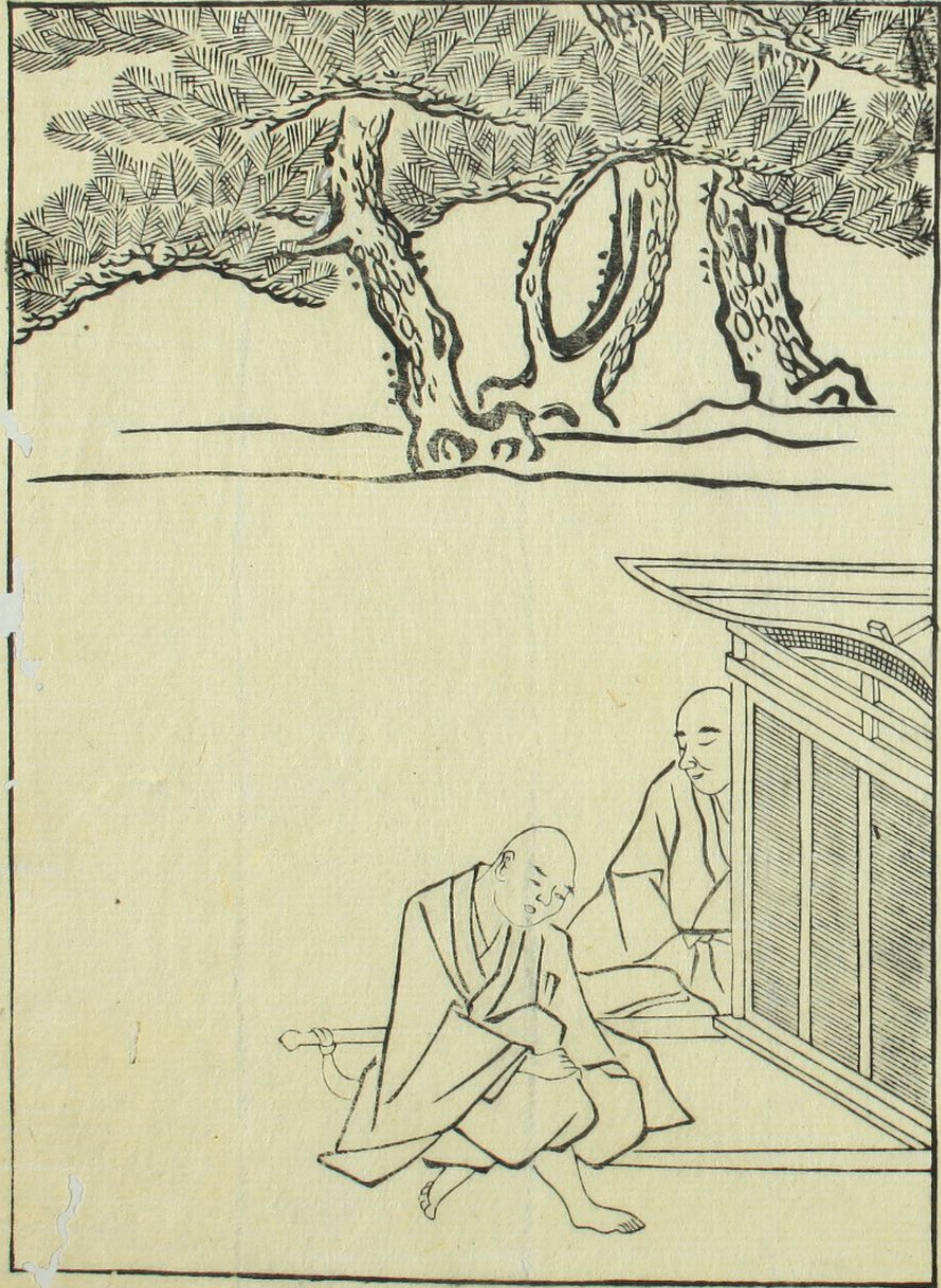
度二度ういのう〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

たゞ返志のぎく。龍王の如意寶珠を得給へ。
いよのよれ。二河乃水火返り。孫陀
本願其寶珠を得たり。其の龍神のく井
し。ためにし。い。ま。こ。ま。い。異。学。異。見。乃
ためにし。い。ま。か。れ。い。貝。の。く。返。ま。て。大海
を。く。う。し。ん。六。欲。四。禪。其。諸。天。来。て。お。れ
し。く。ま。ま。こ。れ。い。信。の。ま。を。ま。て。疑。謗。の
難。を。く。う。く。六。方。恒。沙。乃。諸。佛。ま。つ。つ。て

を。く。う。返。べ。い。が。ま。い。大海の水やうをま
は。ま。し。く。龍。宮。れ。い。れ。あ。し。れ。て。如意
寶珠を返し。ら。ま。こ。れ。い。疑。難。れ。あ。ま。こ。し。と
く。ま。は。ま。た。ま。謗。家。乃。い。れ。あ。し。ま。て。
本願の寶珠を返し。こ。る。返。し。の。れ。い。返。し。返。く。
爾。浮。提。り。て。貧。窮。れ。た。ま。返。あ。り。ま。こ。れ。が
返。し。り。て。極。樂。よ。し。よ。れ。て。薄。地。乃。こ。ま
う。返。ま。ら。び。く。返。孫。が。つ。く。し。を。返。く。れ

行者。弥陀本願の寶珠法たからたまへいまだしるすべし。此
ららん者ものいふく信まことはれうこにたえんまじり
すれららるるたれきたんまのいひもや。こり
深信しんじんは手紙てがみをて疑うたがひ謗うたがひれたまはやく免ゆるたうを
すてく。手てをびれくちくゆる事ことたうれ。
いられる弥陀みだつ。十念じゅうねんの悲願ひがんをわらうして。十五じゅうごは
衆生しゅうじやうを攝取しゆじゆし給たまふ。いったるはまじらる。六字ろくじの
名号なごう法ほうと好このへて。三輩さんばいは往生じやうじやうをさげららん。

永劫えいこくの修行しゆぎやういふれもまじりめそ。功こうを未來みらいの
衆生しゅうじやうにゆづら給たまぬ。超世てうせい乃なり悲願ひがんは。又またらん乃なり
斷たん心しんさうさう。法ほう未み法ほうのつまじりよをらら給たまぬ。
もれらるる往生じやうじやうをさくべくはらん。ほらけ
あに正覺しやうかくを成就じやうじゆゆるや。つまじり又また往生じやうじやうと
まじりや。もれらるる往生じやうじやうはほらけの正覺しやうかくよあり。
ほらけ乃なり正覺しやうかくはつまじり給たまる往生じやうじやうよあり。若不しやうばん
生者じやうじやうれららる。まじりもてまじり。不取ふしゆ正覺しやうかく乃なり



五
三
二
一
〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一
〇



